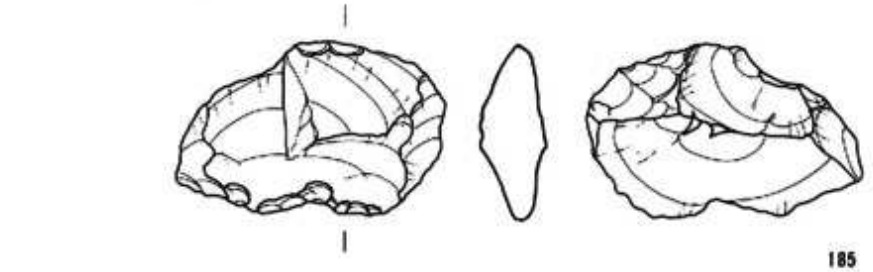
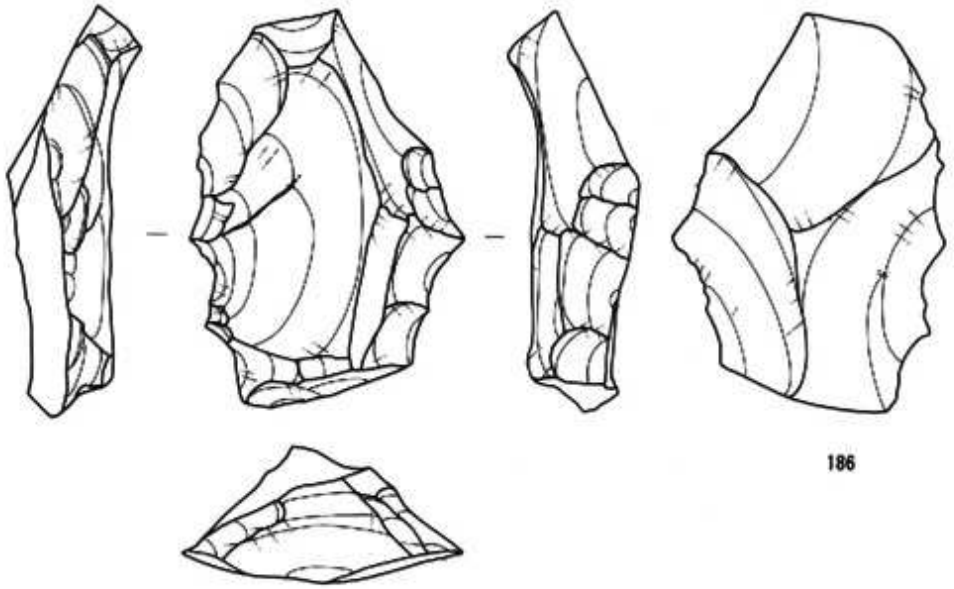
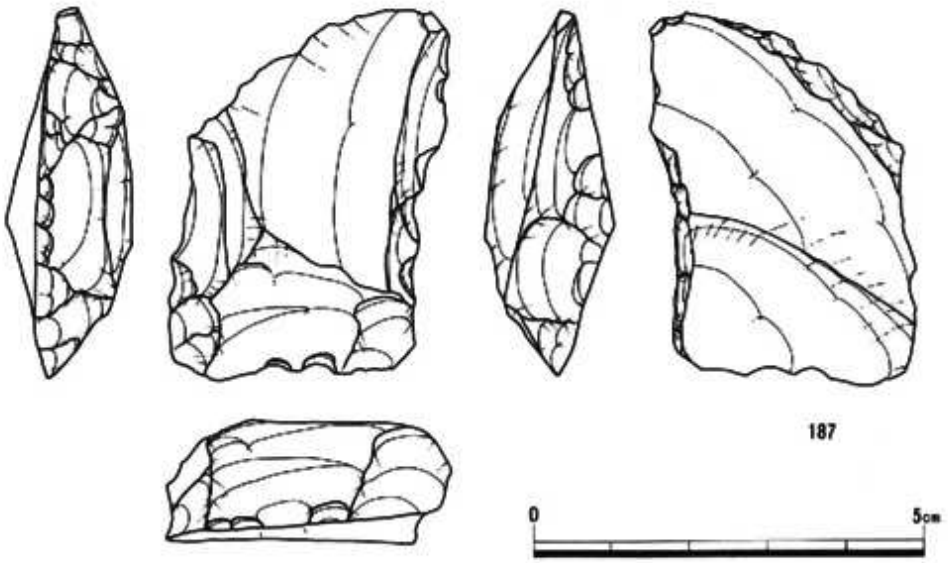


185



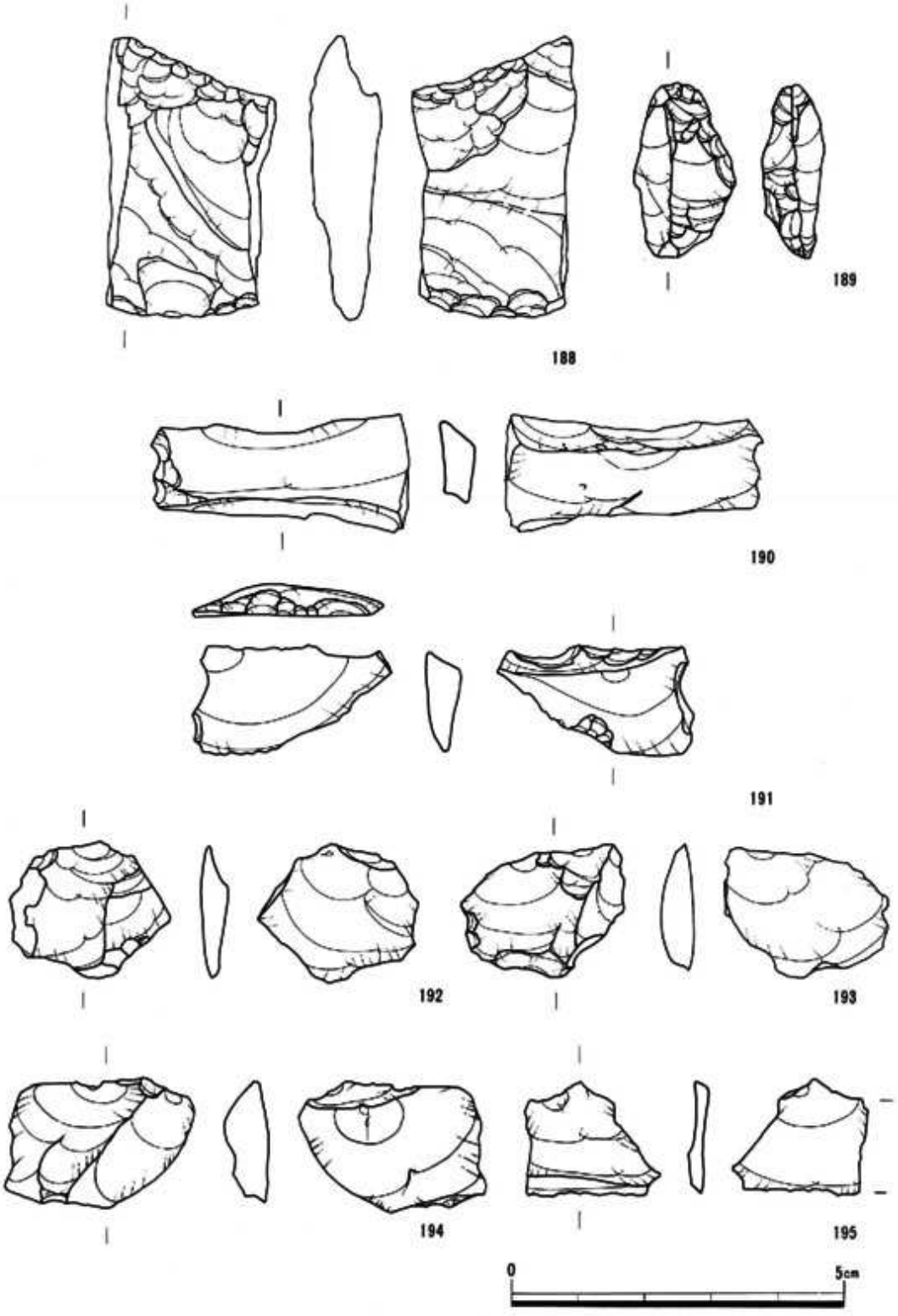
186



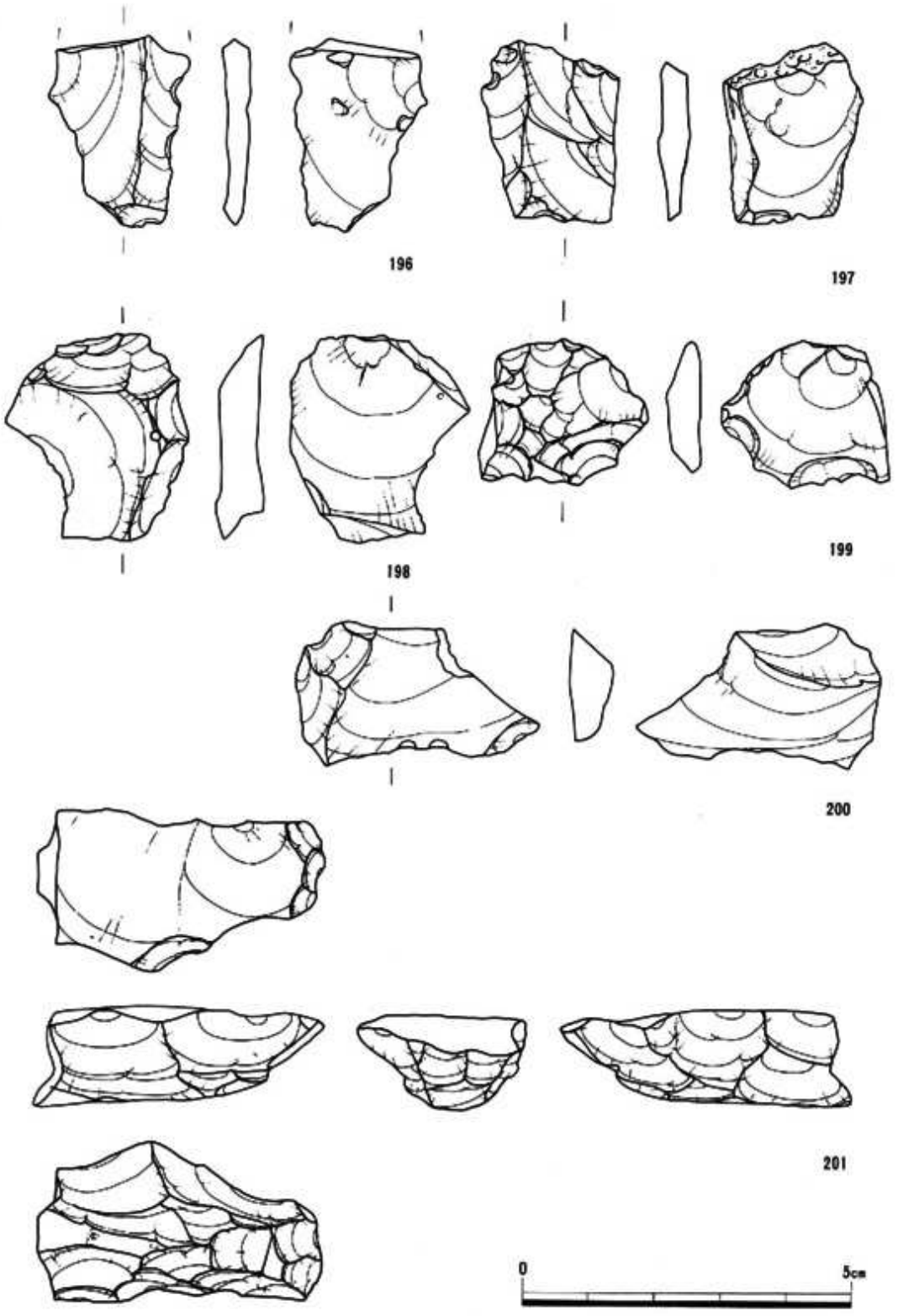
187

0 5cm

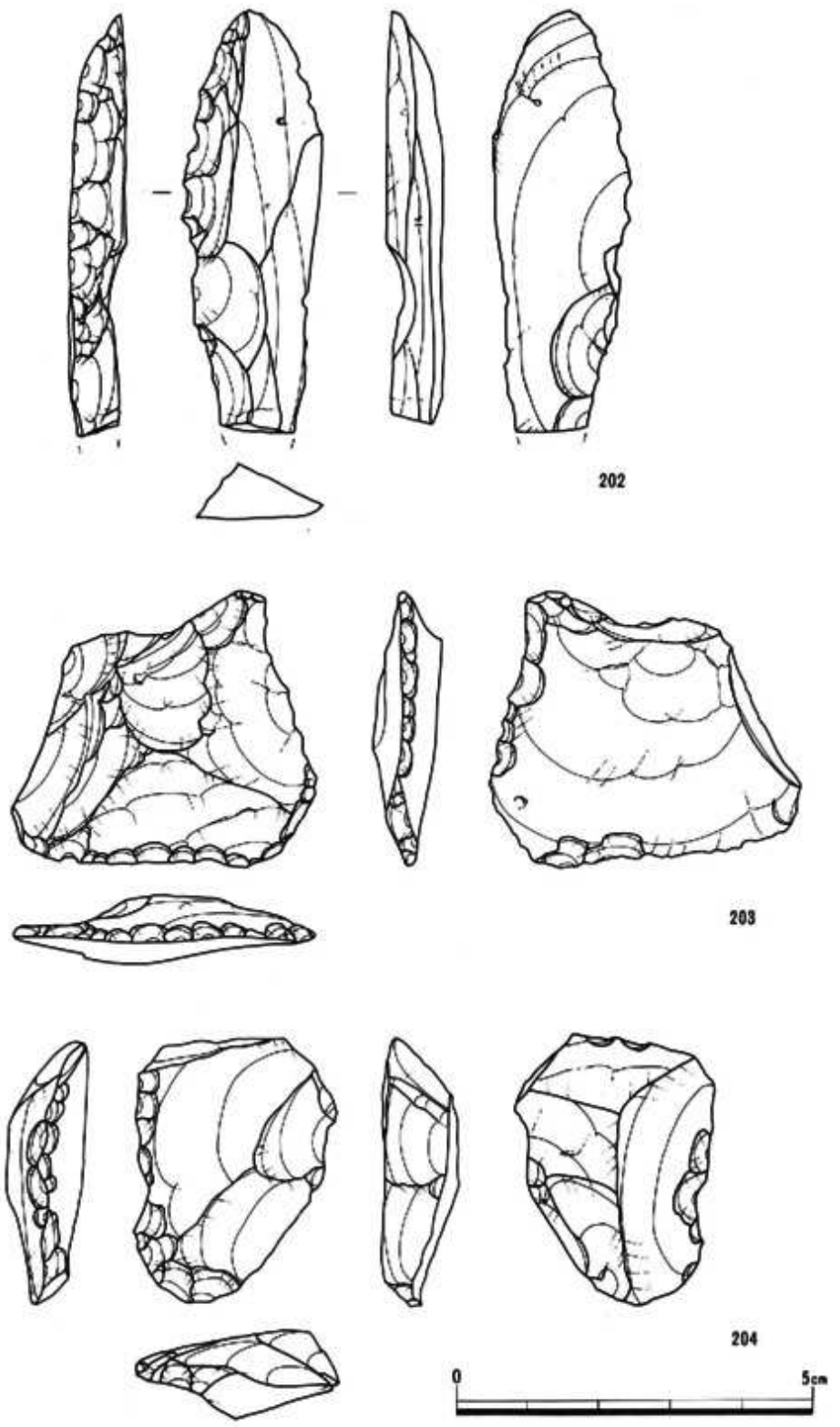
第43図　B地点出土旧石器実測図



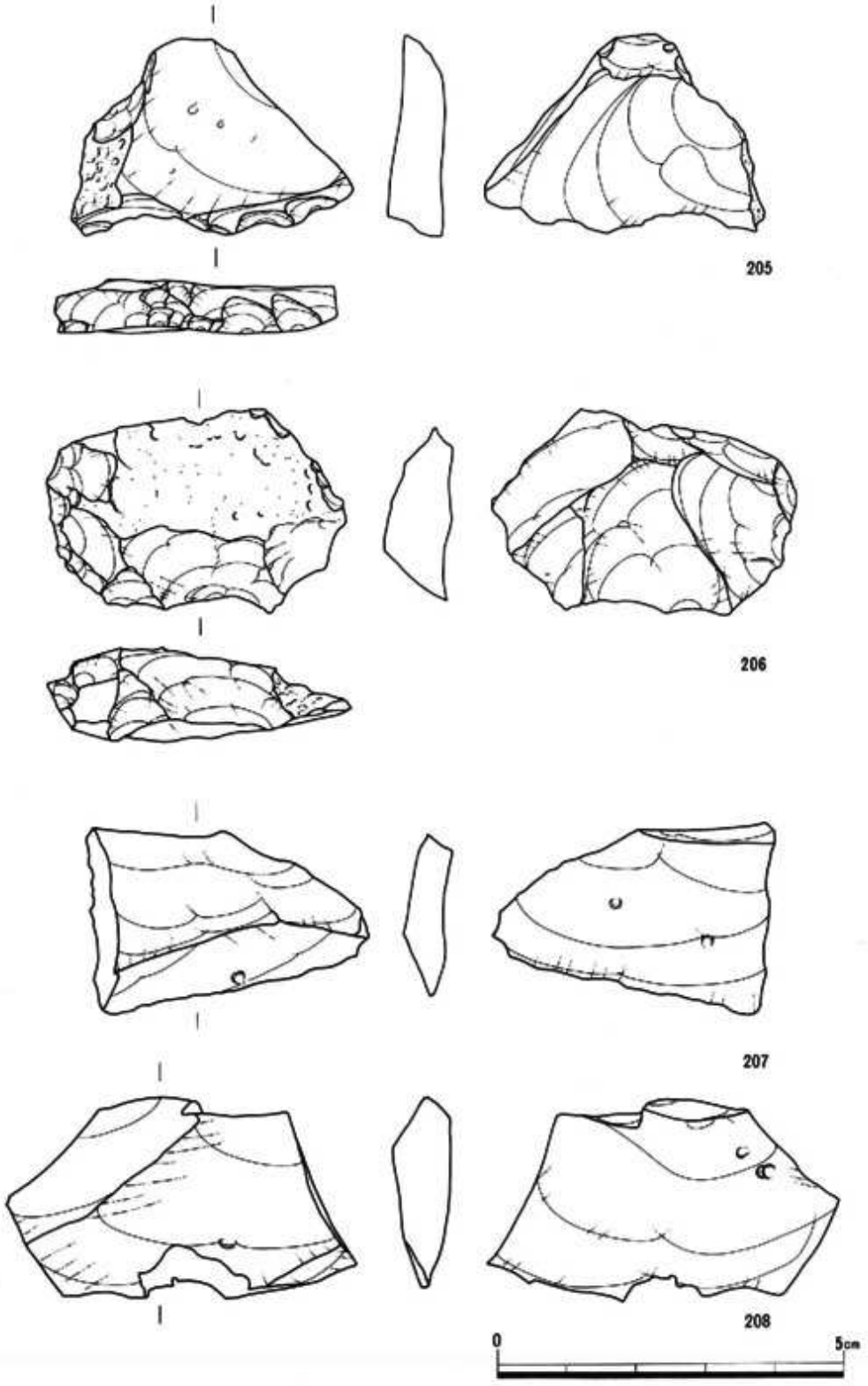
第44図　B地点出土旧石器実測図



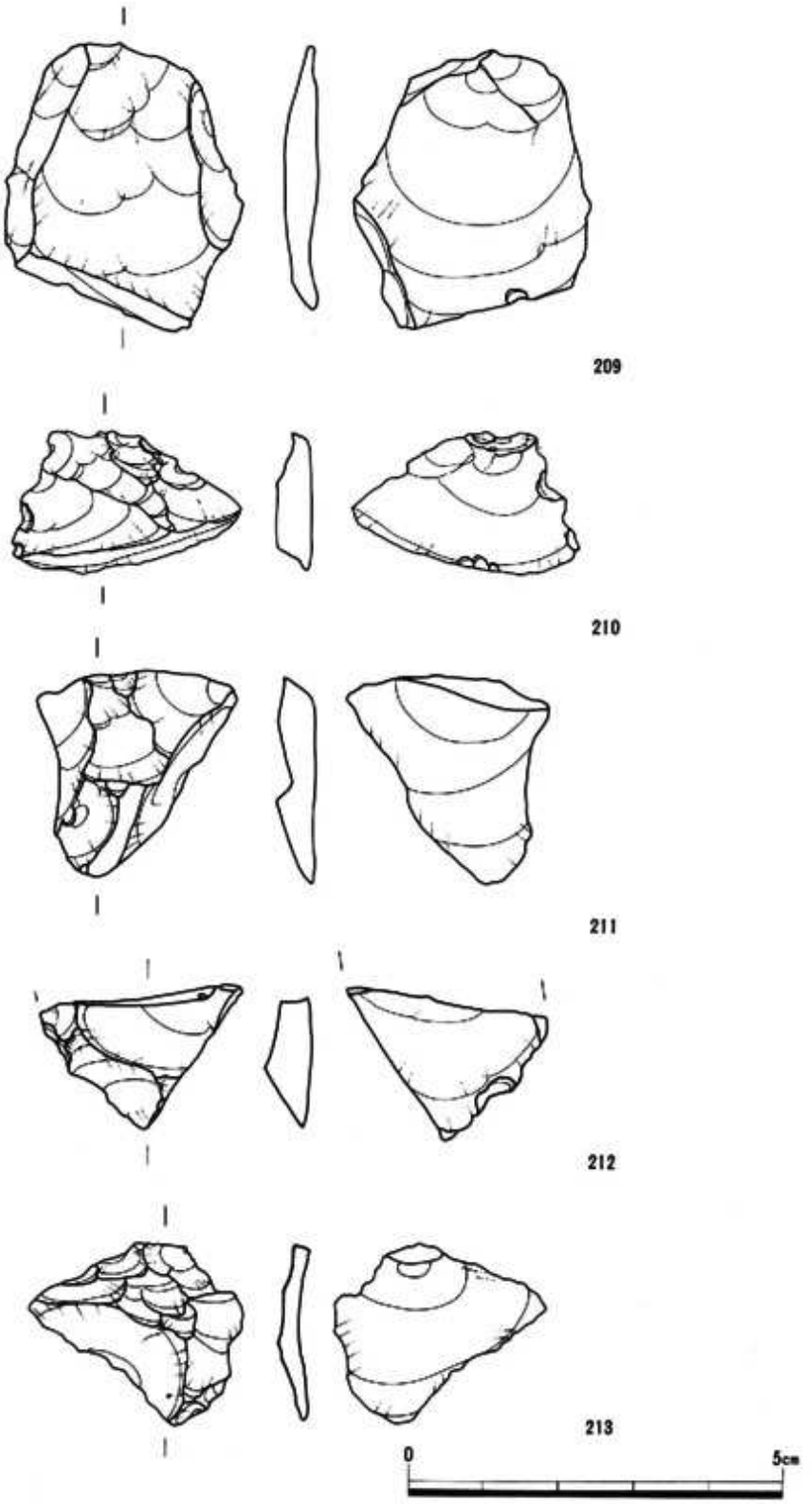
第45図　B地点出土旧石器実測図



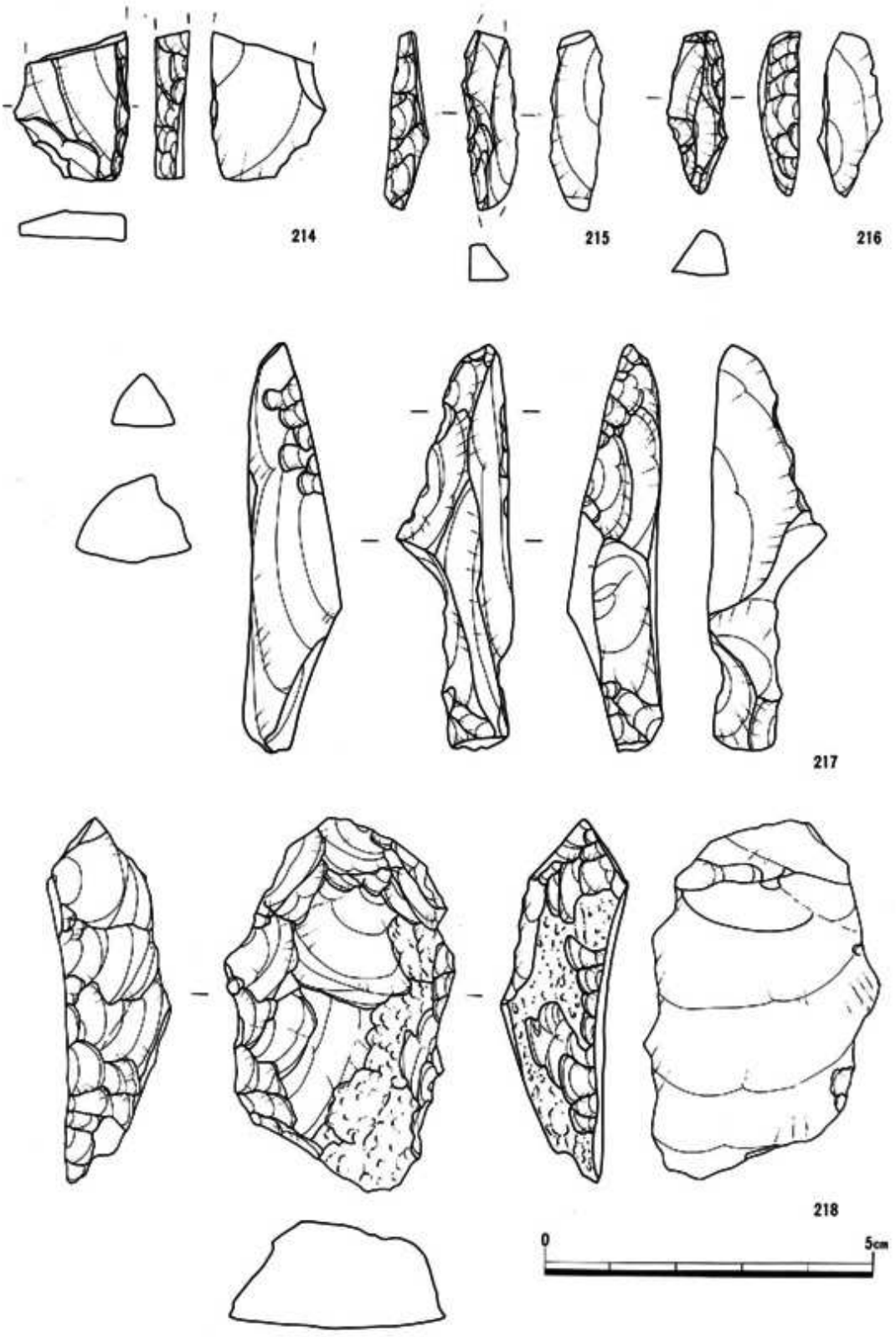
第46図　C地点出土旧石器実測図



第47図　C地点出土旧石器実測図



第48図　C地点出土旧石器実測図



第49図　表面採集遺物

芝生地区

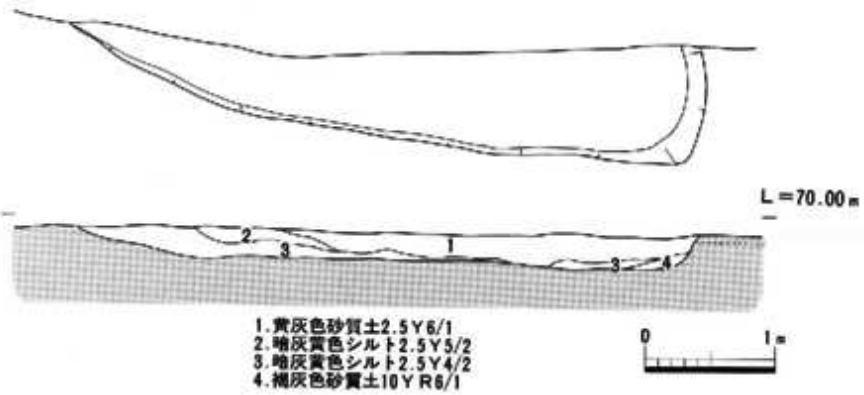
検出された遺構と遺物

自然流路（ＳＲ1001）

水田土壌下の灰色の粘土質シルト層上面で検出された幅約　mの規模の流路で埋土は砂混じりの大小の砂岩の礫によって構成されている。出土した遺物は弥生土器とサヌカイト製の石鏃が１点づつ出土しているだけである。周囲には同じ時期の遺物が出土していないことから、上流からの流れ込みの可能性が強い。また、この自然流路と遺構検出面の上に堆積している暗灰色土層からは、中世の遺物が小片ではあるが出土しているが、流路内の堆積の中には全く混じっていないことから、この流路が機能していた時期はほぼ弥生時代に限定されるものと思われる。

炭窯（ＳＯ1001）（第50図）

ＳＲ1001同様、灰色の粘土質シルト上面で検出された遺構で一部未発掘な部分があるために正確な規模は不明であるが、長さ５ｍ・幅１ｍ以上の大きさはあると考えられる遺構である。遺構内から遺物は全く検出されなかったため、正確な年代は不明であるが、遺構上に堆積した暗灰色土層からは、若干の瓦器と須恵質土器、それに土師器の小片が出土している。須恵質土器と土師器については年代は不明だが、瓦器椀は小片ながら13世紀末から14世紀代前半のものと考えられるものであることから少なくともそれと同時期か若干遡る時期の遺構と思われる。このような炭窯は土成町の金蔵～上井遺跡や市場町日吉～金清遺跡で平安～鎌倉時代の遺物を伴った遺構が検出されていることから、鎌倉時代という年代も矛盾するものではないと考えられる。



第50図　ＳＯ1001実測図

(3) 考　察

弥生時代の遺物について

今回の調査で出土した弥生土器は、壺・高杯・甕を中心とするが、何れも細片の状態のものが多いうえに、出土点数も少なく、遺構から出土したものに関しても覆土中からの出土が殆どで、床面から検出されたものはごく稀である。また包含層出土遺物も遺構出土の土器と同様、細片ばかりで全形の伺えるものは全く出土していない。出土した壺は一般に広口壺とされる口径15～20cm内外の中型のものが中心で、口縁端部が上方或いは上下に拡張され凹線文が施されたものが最も多く、なかには円形浮文が施されたもの（5・98・99）や櫛描波状文（52）も認められる。また口縁端部が垂下する例（5）も若干ではあるが認められる。これらは紫雲出山遺跡出土の壺2類に比定される畿内第Ⅳ様式並行段階のものと考えられるが、101や102のように凹線文B種が多段に施される可能性のあるものは、岡山県の雄町第5類あるいは仁伍式とされるものに類似するものが存在する。直口壺は紫雲出山で壺C2またはC3に分類される凹線文B種が口頸部に多条に施されるもの（53・54・86）と、同じく筒状の口縁に浅い凹線が2条めぐらされただけのもの（7）が出土している。高杯は杯部が屈曲してほぼ垂直に立ち上がり屈曲部に明瞭な稜線を持つものが殆どを占めているが、一部には椀形の形態のもの（10）や水平口縁のもの（55）も認められる。屈曲部に明瞭な稜線を持って立ち上がる高杯は、口縁端部を内外に拡張して平坦な面を作り出す特徴とともに（8・9・56・88・89・106）瀬戸内東部の岡山県ではⅣ－2段階に顕著な存在である。また、杯部が屈曲する形態のもので口縁端部の外方への拡張が著しいもの（90）は、口縁部が屈曲部から斜め外上方にのびるもの（87・91）とともにより後期的な土器で、北原遺跡や前田遺跡から同様の形態のものが出土している。55の水平口縁のものは北原遺跡・光勝院遺跡で高杯Bとされたものである。高杯の脚部は脚端部を上方に拡張する紫雲出山遺跡で高杯脚台2に分類される形態のものと、そのまま直線的に終わるものの2つの形態に分けられるが、端部を拡張するタイプのものは裾部に並行沈線や格子目文・三角形の透かしが施されたものが多く、57のように脚柱部に施される螺旋状の平行線文とともに、紫雲出山遺跡のものに類似する。このような加飾性の強いものは光勝院寺内遺跡でも多く出土しているが、隣接する前田遺跡や北原遺跡などからはまったく出土していない。水差し形土器（105）も北原遺跡で出土例があるが胴部が長くのびる形態のもので、105のような下部が算盤玉形に張る形態のものとは異なっている。甕については口縁部のみの破片が多く、胴部以下の器面調整が判読できる例は少ないが、口縁端部の断面が方形または上方に拡張する例では胴部内面のヘラ削りが頸部との境まで及ぶものが殆どであるのに対して、口縁端部を上下に拡張する例では胴部内面

上半部の調整は指頭圧痕とハケ目調整による例が認められる。これは叩き目の施される例が少ないこととともに隣接する北原・前田両遺跡と同じ傾向である(3)。

本遺跡の弥生土器は、零細な資料ながら上述したような特徴からおおむね中期後半の畿内第Ⅳ様式並行から後期初頭にかけての時期に位置づけられるものと思われる。なかでもＳＢ1001・1003の住居址や土壙ＳＫ1003から出土した三角形の透かしやヘラ先による刺突文・格子目文などの加飾性の強い脚端部をもつ高杯と、口縁部に凹線文を多段に施した直口壺は、紫雲出山遺跡で中期２または中期３とされる畿内Ⅳ様式でも前半の段階のものに対比できるものと思われる。零細なうえに遺構覆土中という出土状況の遺物から、この２つの住居址の時期をⅣ様式でも前半の段階のものとすることが許されるならば、隣接する前田遺跡や北原遺跡など宮川内谷川右川の段丘面から扇状地にかけて展開する弥生遺跡のなかでは時期的には早い段階のものと考えられる。

旧石器時代の遺物について

今回の調査で出土したナイフ形石器を素材となった剥片と調整方法から一応の分類を試みてみると、①背面が２枚のポジティブな剥離面によって構成され、調整が片側縁の他刃縁部側の一部にもほどこされるもの（137）、②背面がそれぞれ１枚のポジティブな剥離面とネガティブな剥離面によって構成され、調整が片側縁部のみに加えられるもの（139・170・171）、③背面が１枚のポジティブな剥離面とネガティブな剥離面で構成され、調整は片側縁と刃縁の一部に加えられるもの(138・173・174・202・214)、④背面が１枚のポジティブな面によって構成され、調整は片側縁と刃縁部の一部に加えられるもの（176・177）、⑤背面が１枚のポジティブな剥離面と複数のネガティブな剥離面で構成され、調整は片側縁のみに認められるもの（140～144・175）、⑥背面が１枚のネガティブな剥離面のみにより構成され、調整は片側縁のみに施されるもの（145・172）、⑦背面が１枚のネガティブな面によって構成され、調整は片側縁に背面側と腹面の両面から加えられるもの（146）、⑧背面が複数のネガティブな剥離面で構成され、側縁の調整が全体に及ぶもの（178・179）、⑨背面の一部に自然面を残し調整が周縁部全体に施されたもの（147）に分けることができる。椎ヶ丸出土の旧石器については、既に天羽利夫氏と高橋正則氏の論考がある。特に高橋氏は川井豊吉氏採集の73点のナイフ形石器について、使用された剥片をⅠ類からⅥ類に分類し、これにａ・ｂ・ｃに分類した調整方法をくわえてナイフ形石器の分類を行っている。このなかで、最も出土数の多いⅠａ類を瀬戸内技法により作出されたナイフ形石器（いわゆる国府型）とし、Ⅰａ１～ａ７類も基本的にはⅠａに属し、採集されたナイフ形石器の過半数にのぼるものとしている(4)。今回の調査で出土したナイフ形石器で、このⅠａ類またはⅠａ１～ａ７類に属すると考

えられるものは②と③に該当し点数は8点と最も多い。また、①のような前回の資料中には認められなかった背面が2枚のポジティブな剥離によって構成される剥片も出土しているが、これは瀬戸内技法に伴うファーストフレイクと考えられることからⅠa類と同じ国府型ナイフに含めてよいと考えられる。この他の内訳は高橋氏分類のⅡa1・a3類が④の2点、Ⅲa類が⑤の6点、Ⅳ類が⑥の3点、Ⅳb類が⑦の1点、Ⅴ類に属するものが⑧の2点、Ⅵa1類が⑨の1点となっている。今回の資料も高橋氏の報告同様に国府型に属するとされたⅠa類とⅠa1～a7類をあわせたものが最も多いことは変わらないが、前回よりⅢa類の比率が高くなっていることが注目される。このうちⅡ類は瀬戸内技法と関連付けられる可能性があると考えられる剥片であるが、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類については瀬戸内技法から作出される翼状剥片と区別され、国府型ナイフの範中から除外されているものである。前回の報告では全体の25パーセントであったが、今回は表採資料をふくめて報告したナイフ形石器の総数28点中13点と45パーセントをこえる高い比率をしめしている。高橋氏はこれら非瀬戸内技法の剥片のうちⅢ・Ⅵ類については横長の剥片を剥ぎ取ることを目的とした石核から剥ぎ取られたものと考えている。今回の資料中の166や167・168・201・217などがこれに該当するものと考えられるが、168・201・217のように分厚い剥片の側縁部のほぼ全体に剥離作業が行われる例と、166・167のように側縁の一部に2～3回剥離作業を行っただけのものに分けられる。また、削器とした186や206も前者の石核に含まれるか、これを転用したものである可能性がある。Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ類は前回の報告では段丘面中央部の第1地点でのみ検出されるとされているが、今回の調査区は高橋氏のいう第2地点あるいは第4地点に近い位置にあると考えられ、段丘面全体にこのような非瀬戸内技法的な剥片が分布している可能性が高いことを示している。これ以外に前回の資料と比較して出土点数が大幅に増加したものに削器・掻器類がある。前回は5点しか報告されなかったが今回は20点出土している。いずれの場合も分厚い剥片が素材として用いられ、151や206・218のように一部に自然面を残す例もある。剥片の側縁部に簡単な調整を加えて削器または掻器としたものは少なく、多くの場合、背面と腹面はともに複数の剥離面で構成され打点は除去されている。また、作出される刃部は直線的な形状に仕上げられるものは少なく、掻器か削器か区別できないものが多い。この中で技法的に注目されるのは187で、素材に分厚い剥片を分割したものを用いているが同様のものは阿波町日吉谷遺跡の国府期の資料の中にも認められる。

4　まとめ

今回、調査が実施された2地区のうち、椎ヶ丸地区は県下最大の旧石器散布地として知られている遺跡である。ただ今回の調査では調査区が遺跡縁辺部の段丘崖線上に設定されたため、調査前から旧石器についてはその成果を疑問視する考えがあった。調査の結果は旧石器の遺物自体の出土はかなり多かったものの、予想どおり斜面の不安定な堆積状況下での出土で、出土状況をもとにした新たな見解を導くことはできずこれまでの表面採集資料に基づく分析結果を追認するにとどまる結果となった。いっぽう、弥生時代については、これまでその存在が予測されていただけで具体的な遺物や遺構の確認が行われていなかっただけに、悪条件であったとはいえ、住居跡をはじめとする遺構の検出や弥生中期後半から後期初頭にかけてというある程度の時期決定ができたことは一定の成果であると考えられる。特にその時期に関しては、段丘下の扇状地上に展開する前田遺跡とともに畿内第Ⅳ様式並行でも古い段階のものが含まれていることは注目される。考察の中で述べたように2つの住居跡・SB1001と1003が畿内第Ⅳ様式でも前半に位置づけられる時期のものであることが認められるならば、宮川内川右岸の弥生中期の扇状地への進出が沖積地や扇状地の扇端部などから扇状地の扇央部、扇頂部というように上へ上へと順次行われていったのではなく、段丘面、扇状地という地理的条件を問わず、ある一時期に一気に進行したことが考えられる。今後の周辺部の調査の進展がまたれるところである。

註

(1)　打製石鏃の名称は小林行雄　佐原真也「紫雲出」詫間町文化財保護委員会　1964年中の呼称方法にのっとる。

(2)　剥片の分類方法については柳田俊雄 ナイフ形石器にみられる剥片生産技術」『旧石器考古学』21　1980年及び高橋正則「徳島県土成町椎ヶ丸遺跡の旧石器」『旧石器考古学』27　1983年中の分類方法に則った。

(3)　前田遺跡の詳細については『土成前田遺跡』徳島県教育委員会　1989年及び『土成前田遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告第2集　1993年を、また、北原遺跡については『土成町北原遺跡』徳島県教育委員会　1988年及び本報告書所収の『北原～大法寺遺跡』を参照。

(4)　椎ヶ丸遺跡出土のナイフ形石器の分類の詳細については高橋正則「徳島県土成町椎ヶ丸遺跡の旧石器」『旧石器考古学』27　1983年中の分類を参照

参考文献

小林行雄　佐原真他『紫雲出』詫間町文化財保護委員会　1964年

大羽利夫「徳島県の遺跡」『日本の旧石器文化』3　雄山閣1976年

徳島県教育委員会「椎ヶ丸遺跡」『徳島県文化財調査概報』　1978年

柳田俊雄「ナイフ形石器にみられる剥片生産技術」『旧石器考古学』21　旧石器文化談話会1980年

高橋護「入門講座弥生土器－山陽1、2」『考古学ジャーナル』173、175　1980年

高橋正則「徳島県土成町椎ヶ丸遺跡の旧石器」『旧石器考古学』27　旧石器文化談話会　1983年

菅原康夫　高橋正則『光勝院羅内遺跡』徳島県教育委員会　1984年

真鍋昌宏『矢ノ塚遺跡－四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』第三冊　香川県文化財保護協会　1987年

林信二　谷匡人『土成町北原遺跡－内陸工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』徳島県教育委員会　1988年

福家清司他『土成前田遺跡－県道舟戸切幡上板線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』徳島県教育委員会　1989年

正岡睦夫　松本岩雄編「弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』　木耳社1992年

第1表　椎ケ丸～芝生遺跡遺構一覧表

遺構名	出土地点	規模（cm）			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
SB1001	D・E－10, 11	525	480	55	弥生土器片・磨製石斧 石鏃 打製石庖丁	
SB1002	F－19, 20	460	385	20	弥生土器片	
SB1003	B・C－7, 8	516	450	50	弥生土器片 石鏃	
SK1001	D－14	98	60	70	弥生土器片	
SK1002	D－14	139	120	60	弥生土器片 打製石庖丁	
SK1003	B・C－8	205	132	40	弥生土器片 鉄鏃	
SX1001	E－7	168	80	8	弥生土器片	
SO1001	G－2, 3	504	94	25	無	

第2表　椎ケ丸～芝生遺跡出土一覧表　SB1001　出土土器

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
1	広口壺	口径 14.5	口縁部は外方に大きく開く。端部は上下に拡張され4条の凹線が巡らされる。	口縁部は内外面とも横ナデ。	橙色	砂粒を多く含む。	
2	広口壺	口径 16	口縁部は頸部からゆるやかに外反する。口縁端部は上下に拡張され、凹線が2条巡らされる。	口縁部は内外面とも横ナデ。	橙色	砂粒を若干含む。	
3	広口壺	口径 15.5	口縁部は頸部から外方に大きく開く。口縁端部は上方にのみ拡張され凹線が2条巡らされる。	口縁部は内外面とも横ナデ。	明赤褐色	砂礫を若干含む。	
4	広口壺	口径 18.8	口縁はななめ外上方に大きく開く。口縁端部は上方にのみ弱く拡張され凹線が1条巡らされる。	口縁部外面は横ナデが施こされるが頸部近くではハケ目調整が加えられる内面は横ナデ。	橙色	砂粒を若干含む。	
5	広口壺	口径 18	口縁部はいったんななめ外上方にのびた後大きく下に垂下する。垂下してできた幅広の端部には凹線と円形浮文が施される。	内面は横ナデ。	橙色	砂粒を多く含む。	
6	壺		頸部は胴部との境でいったんすぼまった後、ななめ外上方にむかってゆるやかに外反する。	外面は頸部から胴部上半にかけてハケ目調整、内面は頸部が指頭によるナデ。胴部は下半にヘラ削りが認められる。	外面はにぶい橙色 内面は赤褐色	砂粒を多く含む。	
7	直口壺	口径 8.5	上方にむかってゆるやかに開く筒状の頸部にやや突り気味の口縁がつく。口縁部には二条の浅い凹線が巡らされる。	口縁部は内外面とも横ナデ 頸部外面はハケ目調整、内面は指頭によるナデ調整。	明赤褐色	礫を若干含む。	
8	高坏	口径20	口縁部は屈曲部に稜を持ち内立気味に立ち上がる。口縁端部は内外に拡張されて平坦部を作る。	内外面とも弱い横ナデが施こされる。	明赤褐色	砂粒を多く含む。	
9	高坏	口径26	口縁部は屈曲部に弱い稜を持って立ち上がる。口縁端部は平坦。口縁部には4条の凹線を巡らせる。	内面は横ナデの後ヘラ磨きが施こされる。	橙色	少量の砂粒を含む。	
10	高坏	口径 12.5	ゆるやかに内弯しながらななめ外上方にのびる楕形の坏部を持つ。口縁部外面には浅い凹線が巡らされている。	内面は口縁端部近くは横ナデ。	浅橙色	少量の砂粒を含む。	

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
11	高坏	底径 9.5	脚端部は脚柱から直線的に外下方にのびる。脚端部は拡張されず尖り気味に収められ凹線が3条巡らされる。	脚部外面はヘラ磨き内面はヘラケズリ。端部近くは横ナデが施こされる。	にぶい橙色	砂粒を多量に混入する。	
12	高坏	底径 13.2	ゆるやかに外下方に開く脚台端部は上方に拡張され、端部との境には沈線とヘラ先による縦の刺突が施こされる。	脚部内面は横位のヘラ削り。	明赤褐色	砂粒を多量に含む。	
13	高坏	径 16.6	ゆるやかに外下方に開く脚台端部は上方に拡張され、2条の凹線が巡らされる他、裾部には三角形の透しが入れられる。	底部外面はヘラミガキとナデ調整、内面はヘラ削り。	橙色	砂粒を含む。	
14	高坏	底径11	内弯気味に外下方に開く脚台端部は上方に拡張され、凹線が2条巡らされる。	脚部内面はヘラ削り。	にぶい橙色	砂礫を多く含む。	
15	高坏	底径 18.0	外下方にむかって大きく開く脚台端部は上方に拡張される。脚部には沈線による格子目文が密状に巡らされる。	脚柱部はナデ調整、内面はヘラ削り。	明赤褐色	砂礫を多く含む。	
16	壺	口径 22	口縁は頸部からなめ外上方に直線的にのびる。口縁端部は若干上方に拡張され凹線が1条巡らされている。	口縁部から頸部にかけて、内外面とも横ナデ	橙色	砂粒を若干含む。	
17	壺	口径 13.5	口縁部は頸部からいったん外方にくの字形に外反した後上方にむかって短く立ち上がる。	口縁部は内外面とも横ナデ。頸部から胴部外面にかけてはヘラ磨き。頸部内面から胴部上半にかけては指頭によるナデ調整。	にぶい赤褐色	砂礫を多く含む。	
18	壺	口径 27	くの字形に屈曲する頸部からなめ外上方に直線的にのびる口縁の端部は上方にのみ拡張される。	口縁部は内外面とも横ナデ。 胴部内面は頸部との境までヘラ削り。	橙色		
19	壺	口径 12.5	口縁部は頸部からなめ外上方に短くのびる。口縁端部は上方にのみ拡張される。胴部は上半で大きく肩が張る。	口縁部から頸部にかけては内外面ともに横ナデ。	橙色		
20	壺	口径15	くの字形に外反する頸部から、なめ外上方に直線的にのびる口縁の端部は上方に拡張される。	口頸部は内外面とも横ナデ。 胴部内面は頸部の境までヘラ削り。	橙色		焼成不良。
21	壺	口径14	くの字形に外反する頸部からなめ外上方にのびる口縁端部は上下に拡張される。	口縁から頸部にかけては内外面とも横ナデ。 胴部内面は頸部との境までヘラ削り。	淡橙色		
22	壺	口径 14.5	くの字形に外反する頸部からなめ外上方にのびる口縁端部は上下に大きく拡張され凹線が2条巡らされている。	口縁から頸部にかけては内外面とも横ナデ。	浅黄橙色		焼成はやや良。
23	壺	口径 20	くの字形に外反する頸部から、なめ外上方にのびる口縁端部は上下に拡張される。	口縁から頸部にかけては内外面とも横ナデ。胴部内面は頸部との境までヘラ削り。	淡橙色		
24	ミニチュア土器	口径 4 高さ8.8	口縁がラッパ形に開く壺の形態をとる	手づくねで成形され全面に指頭の痕を残す。	にぶい橙色		

ＳＢ1002　出土土器

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
44	広口壺	口径 17	口縁は外反状の頸部から外方に大きく張り出し、端部は上下に拡張する。	口縁部内外面は横ナデ。 頸部外面はヘラ磨き、内面は板ナデ、またはヘラ削り。	にぶい褐色	砂粒を若干含む。	
45		底径 5.5	底部は平底。 胴部は底部からなめ外上方に直線的にのび、底部との境に明確な稜をもつ。	胴部外面はヘラ磨き。 胴部から底部内面はヘラ削り。	にぶい橙色		やや不良 焼成はやや不良。
46		底径 6.5	底部は若干上げ底。		橙色		

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
47		底径 7	底部は平底。		明赤褐色		
48		底径 6	底部は平底。 胴部は底部から上方に向かって内湾気味にのびる。	胴部外面にはヘラ磨きが施こされている。	にぶい橙色		
49		底径 7	底部は平底。 底部から胴部にむかってゆるやかになな め外上方に開く。	胴部外面はヘラ磨き。	にぶい橙色		
50		底径 5.5	底部は平底。 底部から胴部にむかってななめ外上方に開く。	胴部内面はヘラ削り、外面はヘラ磨き。	明赤褐色土		

ＳＢ1003　出土土器

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
51	広口壺	口径 15.5	ななめ外上方に開く口縁端部は上方に拡張され凹線が巡らされる。	口縁部内外面とも横ナデ。	赤色	砂粒を多く含む。	
52	広口壺	口径 12	ゆるやかにななめ外上方にのびる口縁端部は上下に拡張され、内外面には櫛描波状文が施こされている。	口縁部内外面とも横ナデ。	橙色	砂粒を多く含む。	
53	直口壺	口径 8	筒状の頸部からわずかに開きながら上方にのびる口縁端部は丸くおさめられる。 口縁から頸部にかけて凹線が巡らされる。	口縁部内面は横ナデ。	にぶい橙色	砂粒をほとんど含まず精良。	
54	直口壺	口径 10	筒状の頸部からわずかに開きながら上方にのびる口縁端部は平坦に作られる。 口縁から頸部にむかって凹線文がめぐらされる。	口縁部内面は横ナデ。	橙色	砂粒をほとんど含まず精良。	
55	高坏	口径28	口縁端部は一旦、外方に水平に拡張された後、下方に垂下する。	口縁部内面は横ナデ、外面はヘラ磨きとナデ調整。	橙色	良好。	
56	高坏	口径22	口縁は明瞭な稜をもって屈曲して立ち上がり口縁端部は内外に若干拡張されて平坦に作られる。	口縁部内外面とも横ナデ。 坏部は外面は殻ナデまたはヘラ削り。	明赤褐色	砂粒を若干含む。	
57	高坏		脚柱部との接合は円盤充填法がとられる坏部との境界付近には細い沈線文がラセンに施こされる。	脚柱部外面は入念なヘラ磨き。	明赤褐色	良好。	
58	高坏	径13.5	ななめ外下方に開く脚台端部は上方に拡張され端部には格子目文と沈線が巡らされている。	外面は横ナデ。 内面はヘラ削り。ヘラ削りの範囲は脚端部まで及ぶ。	赤橙色	砂粒をあまり含まず良好。	
59	高坏	径 8.5	ゆるやかにななめ外下方にのびる脚台端部は上方に拡張され凹線がめぐらされている。	外面は横ナデ、内面は横方向のヘラ削り。	橙色		
60	高坏	径 9.5	ゆるやかにななめ外下方にのびる脚台端部は上方に拡張され1条の凹線がめぐらされる。	外面はナデ調整、内面はヘラ削り。	橙色		
61	甕	口径 14	くの字形に外反する頸部からななめ外上方に直線的にのびる口縁の端部は、上方にのみ拡張される。	口縁部内外面はナデ調整。	にぶい橙色		
62	甕	口径 22	くの字形に屈曲する頸部からいったん水平方向にのばされた口縁は上方にむかって拡張され、端部に2条の凹線が巡らされる。	口縁内外面ともにナデ調整。	にぶい橙色	砂粒をあまり含まず良好。	
63	甕	口径 15.5	くの字形に屈曲する頸部からななめ外上方にのびる口縁の端部は上下に大きく拡張され凹線が2条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ。 胴部外面はハケ目、内面は指頭圧痕とハケ目が併用される。	橙色		

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
64	壺	口径 23.5	くの字形に外反する頸部から、ななめ外上方にのびる口縁の端部は上下に拡張され凹線が2条めぐらされる。	口縁部内外面は横ナデ。 胴部内面は指頭によるナデ調整。	羽赤褐色		
65		底径10	底部は若干上げ底。 胴部は底部からななめ外上方に大きく開く。	胴部外面はヘラ磨き、内面はヘラ削り。	灰オリーブ色		
66		底径9	底部は平底。 底部から胴部にむかってななめ外上方に大きく開き、底部との境は明瞭な稜を持つ。	胴部外面は、ヘラ磨きとヘラ削りが併用される。 内面はヘラ削り。	赤褐色土		
67		底径8	底部は平底。 底部から胴部にむかってやや外反ぎみに大きく開き、底部と胴部の境は明瞭な稜をもつ。壺の底部か？	外面はヘラ磨き。 内面はヘラ削り。	黄橙色	砂粒を多く含む。	焼成は不良。
68		底径7	底部は平底。 底部からななめ外上方にむかってゆるやかにのびる。	胴部外面はハケ目調整、内面はヘラ削り。	灰褐色		
69		底径8.5	底部は平底。 胴部と底部の境は丸みを持つ。	胴部外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りが施こされる。	明赤褐色		
70	壺	底径8	上げ底の底部から内湾しながらななめ外上方にゆるやかにのびる。底部と胴部の境は丸みを持つ。	胴部外面は縦のヘラ磨き、内面はヘラ削り。	にぶい橙色	砂礫を多く含む。	焼成は不良。

ＳＫ1001　出土土器

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
75	高坏	脚端部径 9	ゆるやかに外下方にむけてのびる脚台端部は上方にむけて拡張される。脚部にはヘラ先を用いた平行沈線と縦の刺突が加えられている。	脚部は横ナデ。 内部はヘラ削りが加えられる。	橙色		

ＳＫ1002　出土土器

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
76	壺	口径 15	くの字形に外反する頸部からななめ外上方にのびる口縁の端部は上方に拡張され、凹線が1条めぐらされる。	口縁内外面は横ナデ調整。	明赤褐色	砂粒をあまり含まず良好。	
77	壺	口径 15	くの字形に外反する頸部からななめ外上方にのびる口縁端部は上方に拡張され、凹線が2条巡らされる。	口縁部内外面は横ナデ。	灰色		
78	壺	口径 14	くの字形に外反する頸部からななめ外上方にのびる口縁端部は上方に強く拡張され、凹線が1条巡らされる。	口縁部内外面は横ナデ。	橙色		焼成は不良。
79	壺	口径 14	頸部から外方に直線的にのびる口縁端部は上下に強く拡張され、凹線が3条巡らされている。	口縁部内外面は横ナデ。	橙色		
80		底径 7	底部はやや丸みを持つ。 底部からやや外反気味に外上方にのび胴部と底部の境は稜をもたない。	外面はヘラ磨き。 内面はヘラ削り。	浅黄橙色	砂粒を多く含む。	焼成は不良。

ＳＫ1003　出土土器

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
84	広口壺	口径 17	肩状の頸部からゆるやかにななめ外上方にのびる口縁の端部は上下に拡張され、4条の凹線がつけられる。	口縁部内外面は強い横ナデ。 頸部外面は細かなハケ目調整とヘラ磨きが併用される。 頸部内面は指頭によるナデ。	淡赤橙	砂粒を多く含む。	焼成は不良。
85	壺		胴部から肩状にのびる頸部を持つ壺で頸部と胴部の境には凹線が3条めぐらされる。	頸部外面はヘラ磨き。	にぶい橙色	砂粒をほとんど含まない。	焼成は良好。
86	直口壺	口径 14	頸部からななめ外上方にゆるやかに開く口縁の端部は内外に若干拡張され平坦になる。口縁端部はヘラによる刻み目が施こされ、口頸部には凹線文B種が巡らされる。	口縁部内面はナデ調整。	にぶい赤褐色	砂粒をほとんど含まない。	焼成は良好。
87	高坏	口径 14	坏部との境に明瞭な稜線をもって立ち上がる口縁はなめ外上方にむかってのび端部は尖る。	口縁部外面はナデ調整とヘラ磨き。 坏部外面は縦方向のヘラ磨き。	明赤褐色		焼成は良好。
88	高坏	口径 24.8	口縁部は坏部との境界に明瞭な稜線をもってほぼ水直に立ち上がり、凹線が巡らされている。 口縁端部は平坦に作り出されている。	口縁部内面はナデ調整。 坏部外面は斜行するヘラ磨き。	にぶい橙色		
89	高坏	口径 20	口縁は坏部との境界に明瞭な稜線をもってほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部内外面はナデ調整。 坏部外面はヘラミガキが縦方向と横方向に加えられる。	橙色	砂粒をあまり含まない。	焼成は良好。
90	高坏	口径 20	口縁は坏部との境に明瞭な稜線をもって屈曲しほぼ垂直に立ち上がり4条の凹線をめぐらす。口縁端部は内外方向に拡張して平坦面を作り出している。	口縁部内面は横ナデ。 坏部外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りとヘラ磨きを併用。	明赤褐色	砂粒をあまり含まない。	焼成は良好。
91	高坏	口径 21	口縁は坏部との境界に明瞭な稜線を持って立ち上がり、外上方にむかってのびる。 口縁端。は平坦に作られる。		橙色	砂粒をあまり含まない。	焼成は良好。
92	高坏	脚端径 10	ななめ外下方に開く脚台端部は上方にむかって弱く拡張され凹線を作り出す。脚台裾部にはヘラによる三角形の透しが施こされている。	脚部外面は横ナデ、内面はヘラ削り。	にぶい橙色		
93	壺	口径 18	くの字形に外反する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部がつく。口縁端部は断面方形につくられ凹線が1条めぐらされる。	口縁部内外面はナデ調整。	にぶい橙色		
94	壺	口径 11.5	くの字形に屈曲する頸部からなめ外上方に直線的にのびる口縁端部は断面方形に作られ凹線がめぐらされる。	口縁部内外面はナデ調整。 胴部内面はヘラ削り。	橙色		
95	壺	口径 13.5	くの字形に屈曲する頸部から、なめ外上方にのびる口縁の端部は断面方形につくられる。	口頸部内外面は横ナデ。 胴部は頸部との境までヘラ削り。	浅黄橙色	砂粒を多く含む。	焼成は不良。
96	壺	口径 22	くの字形に外反する頸部からなめ外上方にのびる口縁の端部は上方に拡張され、凹線が2条施こされる。	口縁部内外面は強い横ナデ。 胴部内面は頸部との境までヘラ削り。	にぶい橙色		

包含層出土土器

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
98	広口壺	口径 18	ななめ外上方にのびる口縁の端部は上下に拡張され凹線。	口縁部内外面とも横ナデ。	橙色	砂粒を多く含む。	
99	広口壺	口径	ななめ外上方にのびる口縁の端部は上下に拡張される。				

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
100	広口壺	口径 20	筒状の頸部から、ななめ外上方にゆるく外反してのびる口縁の端部は上下に拡張され凹線が施こされる。	口縁部内外面とも横ナデ。 頸部内面は指オサエの後横ナデ。	明赤褐色		
101	広口壺	口径 21	筒状の頸部からななめ外上方にゆるやかに外反しながらのびる口縁の端部は上下に拡張され凹線が施こされる。 筒状の頸部には円線文B種が施こされる。	口縁部内外面は横ナデ。	にぶい橙色	砂粒を多く含む。	焼成は良好。
102	広口壺	口径 19	筒状の頸部からななめ外上方にむかってゆるく外反しながらのびる口縁の端部は上下に拡張され凹線が施こされる。 筒状の頸部には凹線文B種が巡らされる。	口縁部内外面は横ナデ。	橙色	砂粒を多く含む。	焼成は良好。
103	広口壺	口径19.5	頸部からななめ外上方に大きく開く口縁の端部は断面方形に仕上げられ凹線が1条めぐらされる。	口縁部内面は強い横ナデ。 頸部内面ヘラ削り。	淡橙色		焼成不良。
104	広口壺	口径 14	筒状の細長い頸部にななめ外上方にのびる短い口縁部がつく。口縁端部は上下に強く拡張され、凹線が施こされる。		淡黄橙色	砂粒を多く含む。	
105	水差し形土器	胴部最大径 14	横方向の把手がついた胴部は下半部にむかっていったん広がった後底部近くで内側に屈曲する。	胴部内面上半はハケ目調整。	淡黄橙色	砂粒を多量に含む。	
106	高坏	口径 24	口縁部は坏部との境に弱い段を形成して上方にほぼ垂直に立ち上がり凹線が4条ほどこされる。 口縁部は平坦に作り出される。	口縁部内向は横ナデ。	橙色		
107	高坏	脚柱部径 5	脚柱部外面には並行沈線が4本施こされる。	脚柱部外面はヘラ磨き。	淡赤橙色	砂粒を多量に含む。	焼成は不良。
108	高坏	裾端部径 12	ななめ外下方にむかって直線的に開く脚台端部は若干肥厚し丸くおさめ、端部近くは凹線が施こされる。	脚部外面は縦のヘラ磨き、内面は横方向のヘラ削り。	にぶい橙色	砂粒を多く含む。	
109	高坏	脚端部径 8.5	ななめ外下方にのびる脚台の端部は上方に拡張される。	脚端部は強い横ナデが施こされる。 脚部内面はヘラ削り。	にぶい橙色		
110	高坏	脚端部径 9.5	外下方に直線的にのびる脚台の脚端部は上方に弱く拡張され、1条の凹線が巡らされる。	脚裾部外面は強い横ナデ内面はヘラ削り。	橙色		
111	高坏	脚端部径 13.5	外下方にむかってゆるやかに開く脚台の裾端部は上方に拡張される。脚台裾部は平行沈線とヘラを用いた刻突文が施こされる。	裾部内面はヘラ削り。	橙色	砂粒を含まず精良な粘土。	焼成は良好。
112	甕	口径 19	くの字形に外反する頸部からななめ外上方にのびる口縁端部は断面方形に仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ。 肩部内面は頸部との境までヘラ削りが施こされる。	にぶい橙色		
113	甕	口径 12.5	ななめ外上方に開く口縁の端部は断面が方形に仕上げられる。	頸部外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りが施こされる。	赤橙色	砂粒をあまり含まない。	
114	甕	口径 14.5	くの字形に屈曲する頸部からななめ外上方にのびる口縁端部は上方に拡張される。	頸部と肩部の境付近には指オサエが施こされた後ハケ目調整が加えられる。 肩部内面のヘラ削りは頸部との境付近まで及ぶ。	明赤褐色	砂粒を多く含む。	
115	甕	口径 15	口縁端部は上方のみ拡張して端部には凹線が巡らされる。	口縁部内外面は横ナデ。	明赤褐色		焼成不良。
116	甕	口径 16	口縁端部は上下に拡張され2条の凹線が巡らされる。	口縁部内外面は横ナデ。	赤橙色		
117	甕	口径 26	口縁端部は上下に拡張され凹線が巡らされる。	口縁部内外面はナデ。	にぶい橙色		
118	甕	口径 18.5	くの字形に外反する頸部に口縁端部を上下に拡張した短かい口縁部がつく。	口縁部内外面は横ナデ。	橙色		

番号	器種	法量（cm）	形態	技法	色調	胎土	備考
119	壺	口径 18.5	くの字形に外反する頸部に胴部を上下に拡張し、凹線文を施こした短かい口縁部がつく。	口縁部内外面とも横ナデ。	にぶい橙色		
120	壺	口径 18.5	くの字形に外反する頸部に胴部を上下に拡張し、凹線を施こした口縁がつく。	胴部外面は並行タタキ。 内面は指頭による圧痕が認められる。	明赤褐色	砂粒を多量に含む。	焼成良好。
121	甕	口径 15	くの字形に外反する頸部に胴部を上下に拡張し凹線を施こした口縁部がつく。	口縁部外面に施こされる横ナデは胴部上半まで及ぶ。 胴部内面は指オサエの後ハケ目が施こされる。	浅黄橙色	砂粒をあまり含まない。	焼成良好。

ＳＢ1001　出土石器計測一覧表

番号	機種	現存最大長(cm)	現存最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
33	打製石鏃	29	19	4	2.2	サヌカイト	基部を欠失
34	打製石鏃	30	20	5	2.5	サヌカイト	
35	打製石鏃	29	15	6	2.1	サヌカイト	先端部を欠失
36	打製石鏃	22	17	6	1.8	サヌカイト	先端部を欠失
37	打製石鏃	22	14	4	1.7	サヌカイト	未製品
38	打製石鏃	43	21	7	7.6	サヌカイト	未製品
39	打製石庖丁	42	105	7	41.8	結晶片岩	
40	打製石庖丁	43	97	7	42.1	結晶片岩	
41	打製石庖丁	59	103	10	56.3	結晶片岩	
42	打製石庖丁	46	60	8	31.3	結晶片岩	
43	磨製石斧	151	98	62	1650	蛇紋岩？	

ＳＢ1003　出土石器計測一覧表

番号	機種	現存最大長(cm)	現存最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
71	打製石鏃	29	15	4	2	サヌカイト	
72	打製石鏃	28	17	6	2.4	サヌカイト	
73	打製石鏃	31	18	4	2.2	サヌカイト	両端を欠失
74	打製石鏃	32	16	3	1.4	サヌカイト	

ＳＫ1002　出土石器計測一覧表

番号	機種	現存最大長(cm)	現存最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
81	打製石庖丁	38	101	13	73.4	粘板岩	
82	打製石庖丁	44	94	5	38.6	結晶片岩	
83	打製石庖丁	35	51	5	14.6	結晶片岩	

包含層出土石器計測一覧表

番号	種 類	現存最大長(cm)	現存最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 材	備 考
122	打製石鏃	35	15	5	2.4	サヌカイト	基部を欠失
123	打製石鏃	28	13	5	1.8	サヌカイト	
124	打製石鏃	27	20	8	3	サヌカイト	
125	打製石鏃	40	12	4	2.1	サヌカイト	先端を欠失
126	打製石鏃	27	13	3	0.8	サヌカイト	
127	打製石鏃	20	12	3	0.6	サヌカイト	
128	打製石鏃	38	16	5	3.6	サヌカイト	
129	打製石鏃	25	16	5	1.8	サヌカイト	
130	打製石鏃	29	20	4	1.8	サヌカイト	先端と基部を欠失
131	打製石庖丁	42	78	10	59.3	結晶片岩	
132	打製石庖丁	21	46	6	8.4	結晶片岩	
133	打製石庖丁	45	86	5	36	結晶片岩	
134	打製石庖丁	39	70	9	40.1	結晶片岩	
135	打製石庖丁	42	80	7	32.7	結晶片岩	
136	磨製石斧	77	47	18	110.3	蛇紋岩?	

A地点　出土石器計測一覧表

番号	種 類	現存最大長(cm)	現存最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 材	備 考
137	ナイフ形石器	59	17	7	8.6	サヌカイト	
138	ナイフ形石器	52	19	6	7.5	サヌカイト	
139	ナイフ形石器	36	20	5	4.4	サヌカイト	
140	ナイフ形石器	34	17	6	3.1	サヌカイト	
141	ナイフ形石器	43	22	9	7.9	サヌカイト	
142	ナイフ形石器	33	14	8	3.5	サヌカイト	
143	ナイフ形石器	27	11	4	1.3	サヌカイト	
144	ナイフ形石器	26	14	4	1.5	サヌカイト	
145	ナイフ形石器	40	18	5	4.9	サヌカイト	
146	ナイフ形石器	36	18	9	5.4	サヌカイト	
147	ナイフ形石器	43	15	11	4.8	サヌカイト	
148	ナイフ形石器	33	15	6	3.2	サヌカイト	
149	ナイフ形石器?	35	23	7	7.4	サヌカイト	
150	削器	36	21	10	7.4	サヌカイト	
151	削器	33	29	12	12.3	サヌカイト	
152	削器	25	36	11	9.9	サヌカイト	

番号	器種	現存最大長(㎝)	現存最大幅(㎝)	最大厚(㎝)	重量(g)	石材	備考
153	削器?	25	31	13	9.5	サヌカイト	楔器?
154	削器	36	25	10	7.4	サヌカイト	
155	削器	33	27	9	11.5	サヌカイト	
156	削器?	18	30	4	3.5	サヌカイト	
157	削器?	16	31	3	2.7	サヌカイト	ナイフ形石器?
158	横長剥片	17	29	3	1.8	サヌカイト	
159	横長剥片	16	35	3	2	サヌカイト	
160	横長剥片	25	36	5	5.3	サヌカイト	
161	横長剥片	24	46	3	5.3	サヌカイト	
162	横長剥片	19	25	4	2.4	サヌカイト	
163	横長剥片	20	21	4	2	サヌカイト	
164	縦長剥片	22	31	8	5.3	サヌカイト	
165	縦長剥片	58	63	11	21.1	サヌカイト	
166	石核	39	35	8	13	サヌカイト	
167	石核	38	28	5	7.5	サヌカイト	
168	石核	27	42	14	15.3	サヌカイト	
169	角錐状石器	69	43	21	60	サヌカイト	

B地点　出土石器計測一覧表

番号	器種	現存最大長(㎝)	現存最大幅(㎝)	最大厚(㎝)	重量(g)	石材	備考
170	ナイフ形石器	43	21	4	4.7	サヌカイト	
171	ナイフ形石器	19	14	5	1.4	サヌカイト	
172	ナイフ形石器	30	13	4	1.6	サヌカイト	
173	ナイフ形石器	28	15	6	2.4	サヌカイト	
174	ナイフ形石器	62	29	12	23.8	サヌカイト	
175	ナイフ形石器	42	17	8	5.1	サヌカイト	
176	ナイフ形石器	47	20	9	9	サヌカイト	
177	ナイフ形石器	41	14	6	3.6	サヌカイト	
178	ナイフ形石器	39	14	7	4.9	サヌカイト	
179	ナイフ形石器	31	13	3	1.5	サヌカイト	
180	ナイフ形石器	32	18	5	3.1	サヌカイト	
181	ナイフ形石器	14	16	5	1.1	サヌカイト	
182	削器	51	36	18	25.1	サヌカイト	
183	削器	31	57	12	18.8	サヌカイト	
184	削器	37	28	7	10.4	チャート	

番号	機種	現存最大長(cm)	現存最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
185	削器	22	34	9	5.7	サヌカイト	
186	削器	51	35	13	21.7	サヌカイト	
187	削器	47	36	17	25.7	サヌカイト	
188	楔形石器	42	25	11	11.5	サヌカイト	
189	楔形石器	27	16	9	3.1	チャート	
190	縦長剥片	18	38	6	4.4	サヌカイト	
191	横長剥片	17	30	5	2.2	サヌカイト	
192	横長剥片	21	24	4	2	サヌカイト	
193	横長剥片	20	25	5	2.1	サヌカイト	
194	横長剥片	29	29	6	3.3	サヌカイト	
195	横長剥片	17	21	3	1.1	サヌカイト	
196	縦長剥片	29	22	4	2.7	サヌカイト	
197	縦長剥片	28	21	5	3.6	サヌカイト	
198	調整剥片	32	28	7	5.3	サヌカイト	
199	調整剥片	22	26	5	4.6	サヌカイト	
200	調整剥片	22	37	7	4.6	サヌカイト	
201	石核	24	43	14	18.4	サヌカイト	

C地点　出土石器計測一覧表

番号	機種	現存最大長(cm)	現存最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
202	ナイフ形石器	59	20	8	9.4	サヌカイト	
203	削器	39	43	9	13.3	サヌカイト	
204	削器	38	28	11	10.5	サヌカイト	
205	削器	29	41	8	8.7	サヌカイト	
206	削器	29	43	9	13.5	サヌカイト	
207	翼状剥片	27	41	6	7.7	サヌカイト	
208	横長剥片	29	51	8	12.8	サヌカイト	
209	縦長剥片	38	32	4	6.8	サヌカイト	
210	横長剥片	18	31	5	3.5	サヌカイト	
211	調整剥片	26	27	5	3.4	サヌカイト	
212	調整剥片	19	27	6	2.3	サヌカイト	
213	調整剥片	24	29	3	1.7	サヌカイト	

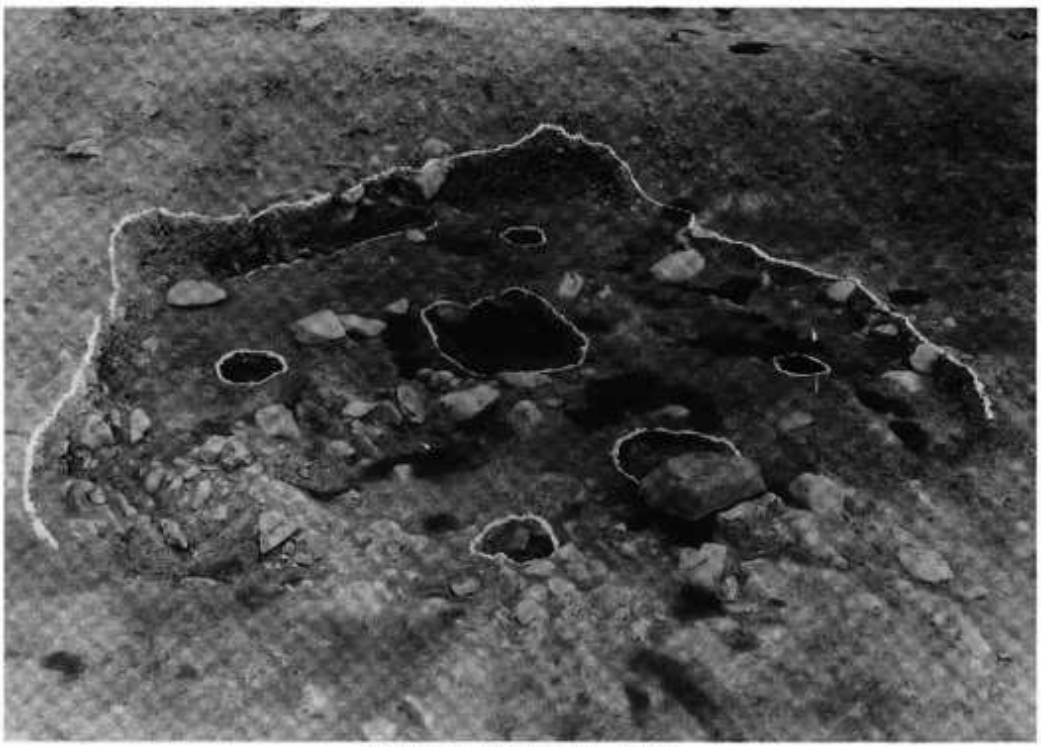
表面採集資料　計測一覧表

番号	種　種	現存最大長(mm)	現存最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石　材	備　考
214	ナイフ形石器	23	18	5	2.7	サヌカイト	
215	ナイフ形石器	27	8	6	1.3	サヌカイト	
216	ナイフ形石器	25	9	7	1.5	サヌカイト	
217	石核	83	18	13	11.6	サヌカイト	
218	剥離	57	38	15	34.6	サヌカイト	

椎ヶ丸調査区遠景

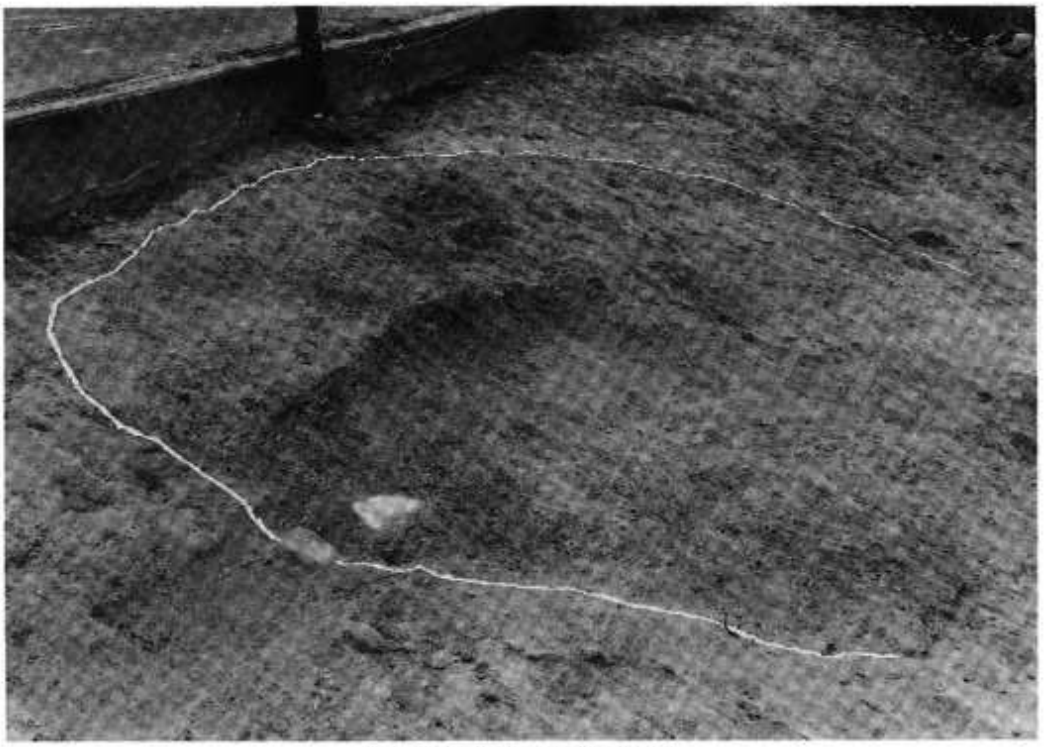
芝生調査前風景

図版 2

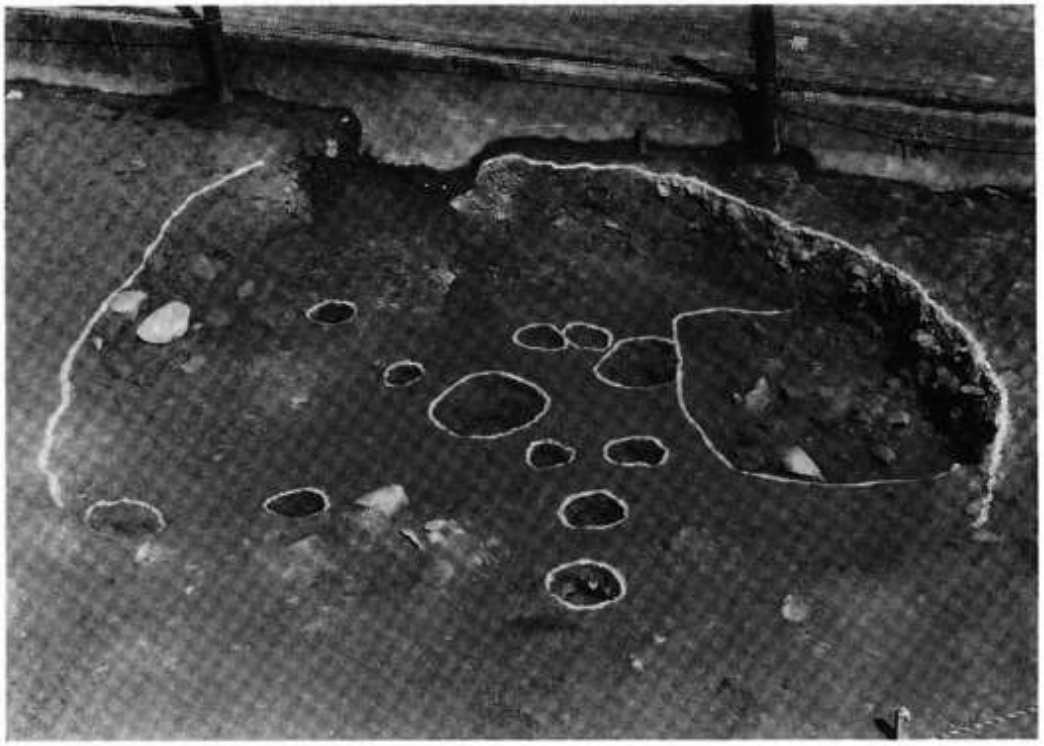


S B 1001完掘状況（南から）

S B 1001完全掘状況（北から）

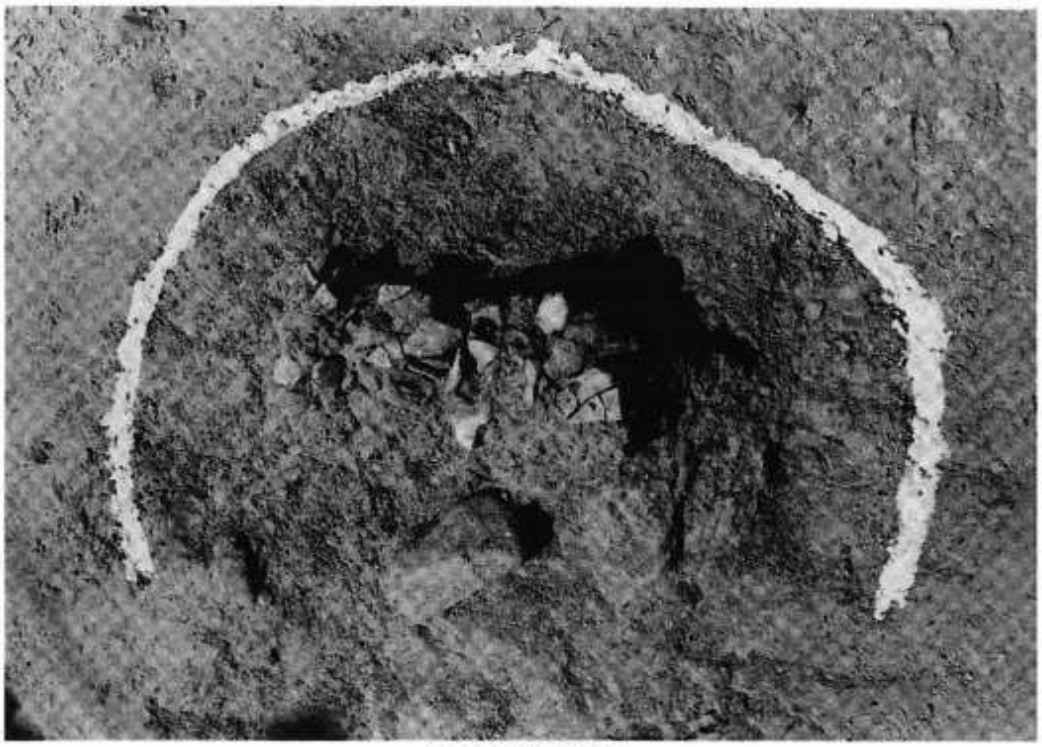


S B 1003検出状況（西から）

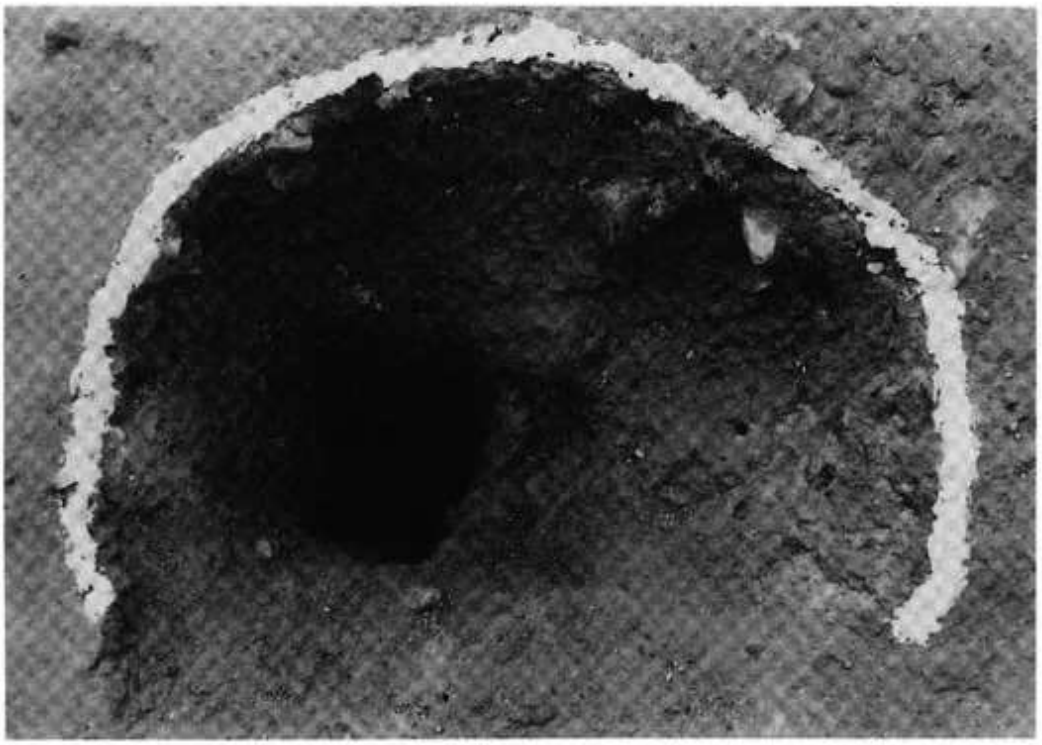


S B 1003完掘状況（南から）

図版 4

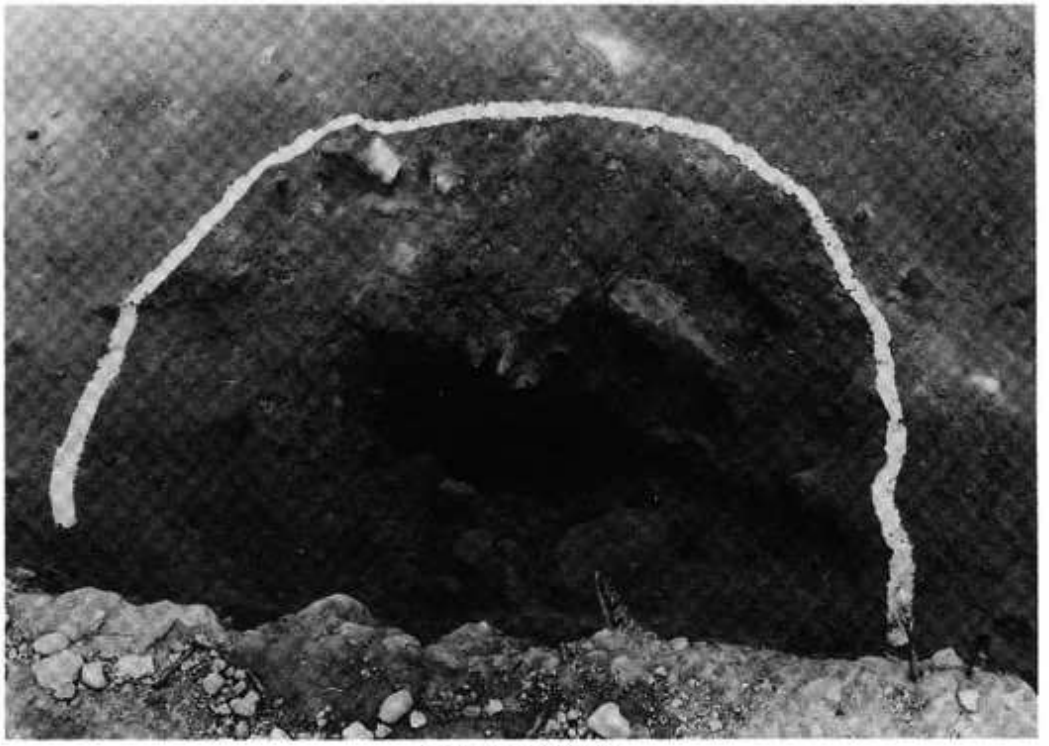


ＳＫ1001検出状況



ＳＫ1001完掘状況

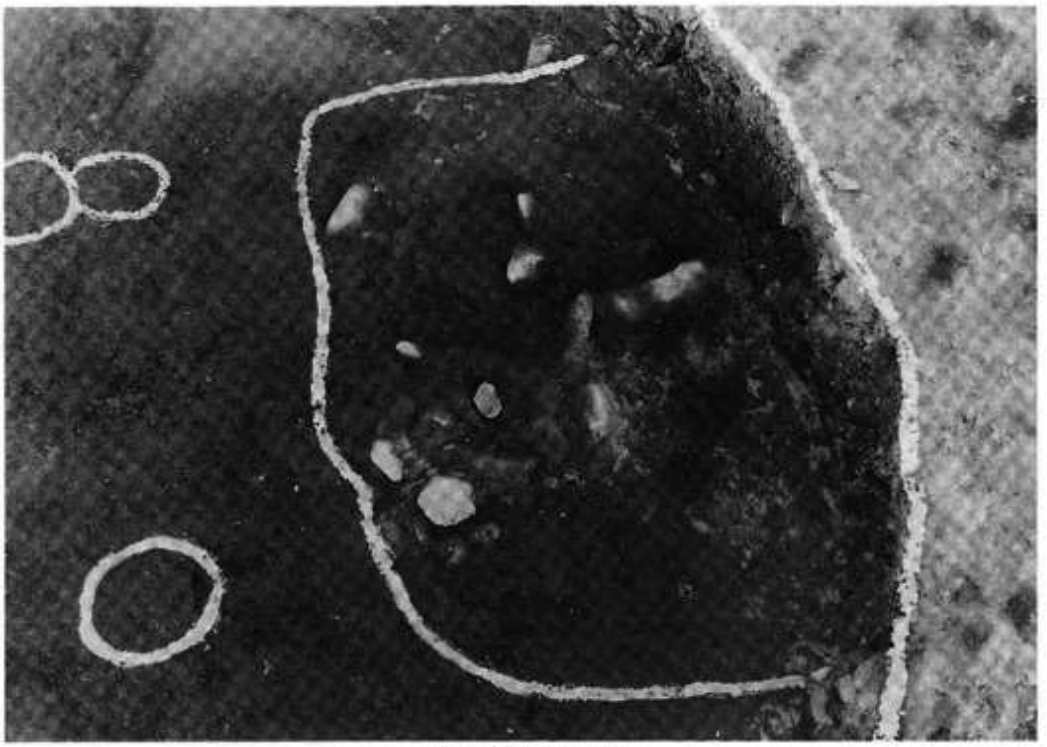
ＳＫ1002検出状況



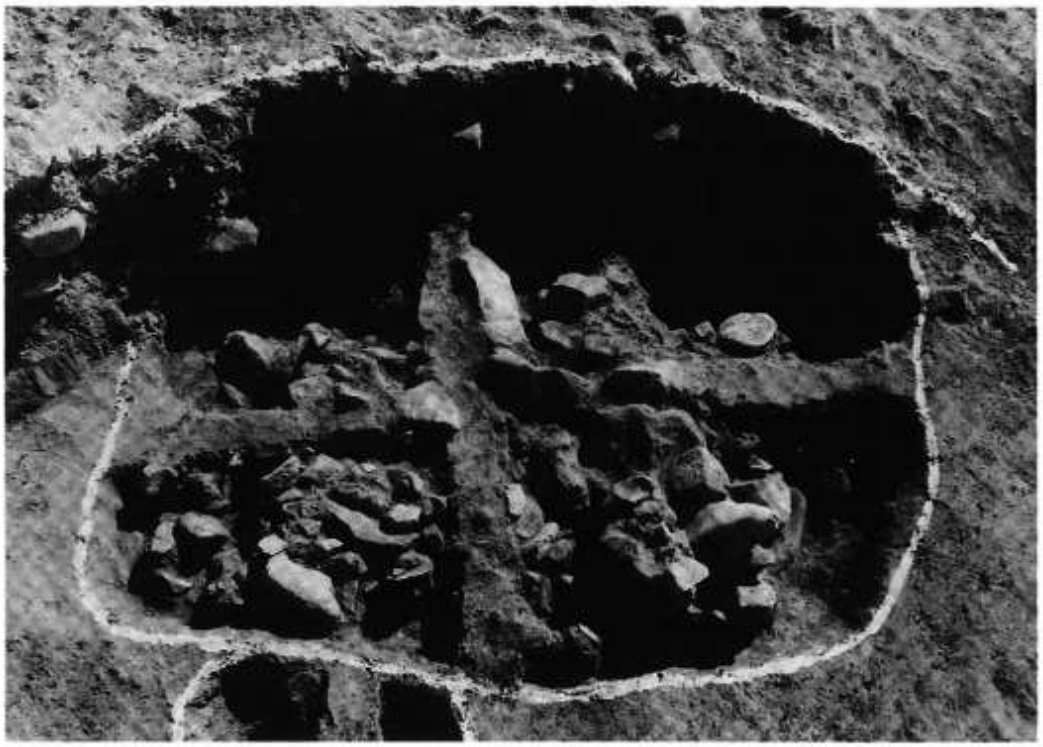
ＳＫ1002完掘状況

図版 6

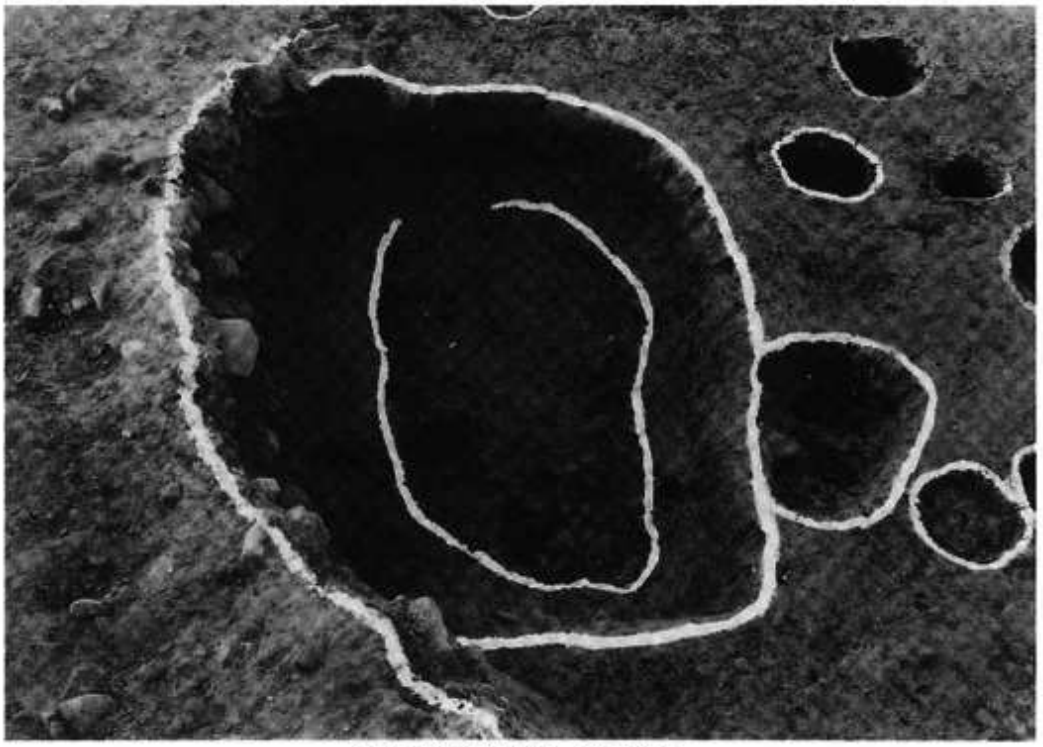
ＳＫ1001・1002完掘状況



ＳＫ1003検出状況

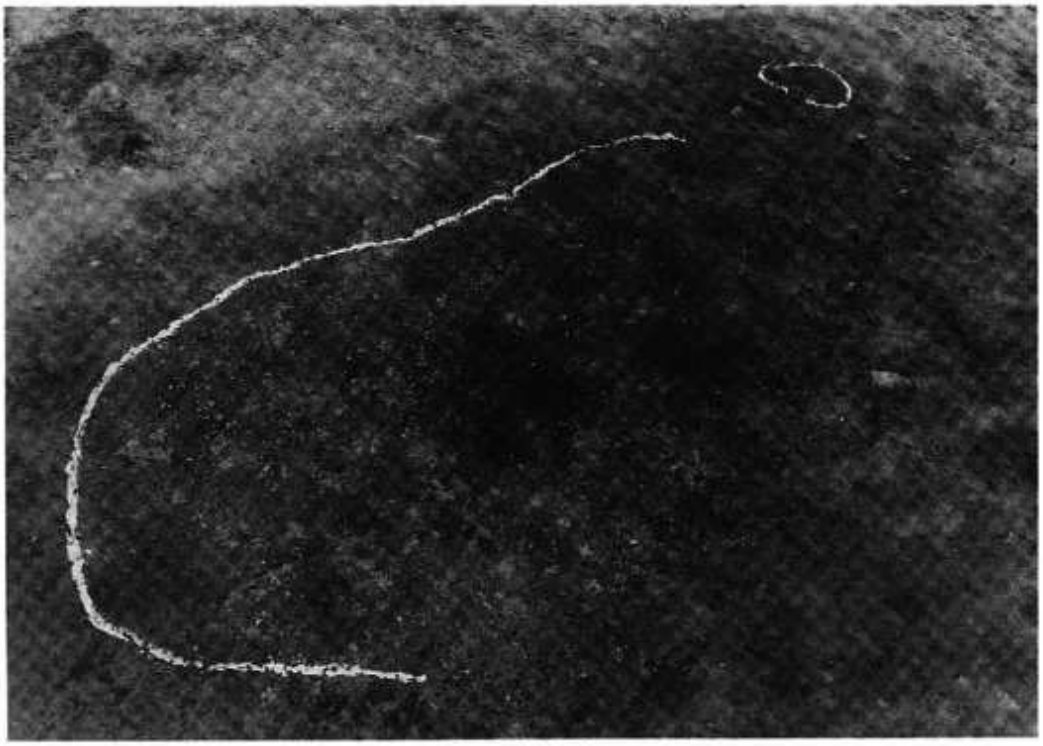


ＳＫ1003掘り下げ状況（西から）

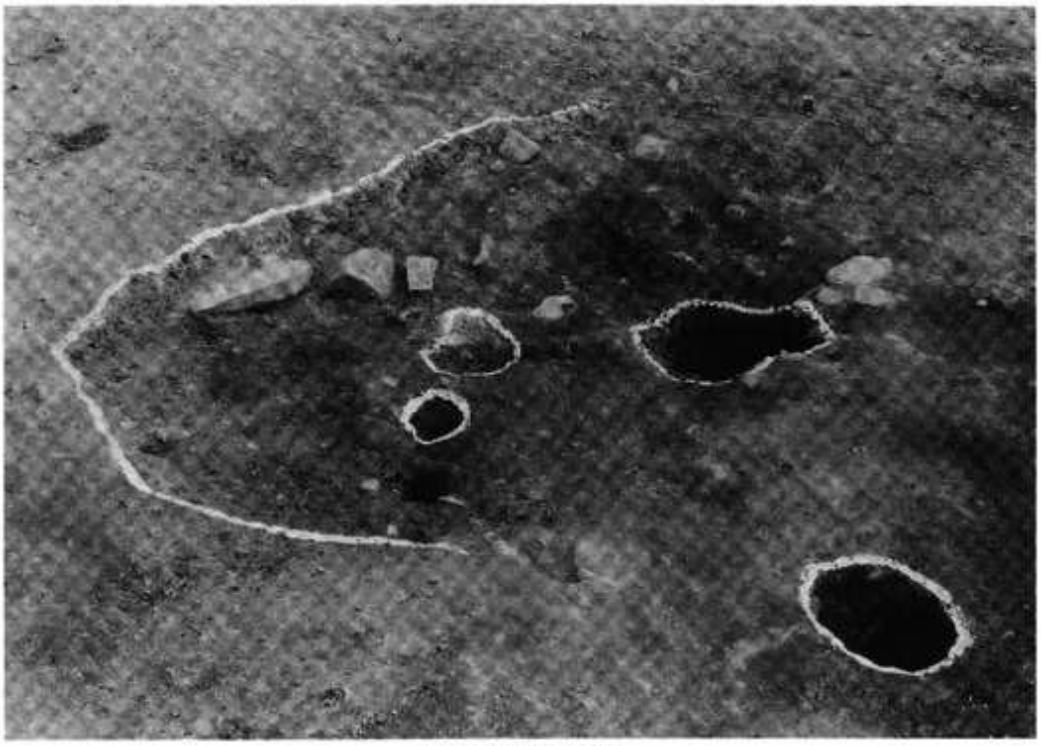


ＳＫ1003完掘状況（北から）

図版 8



ＳＸ1001検出状況



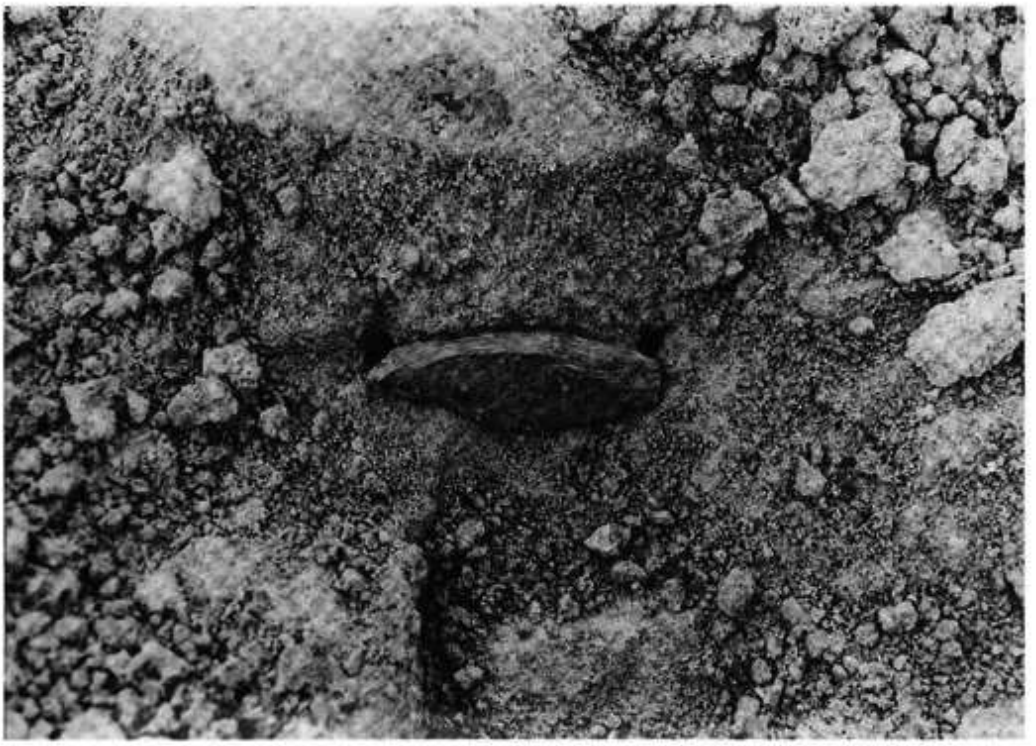
ＳＸ1001完掘状況

SB1001遺物出土状況

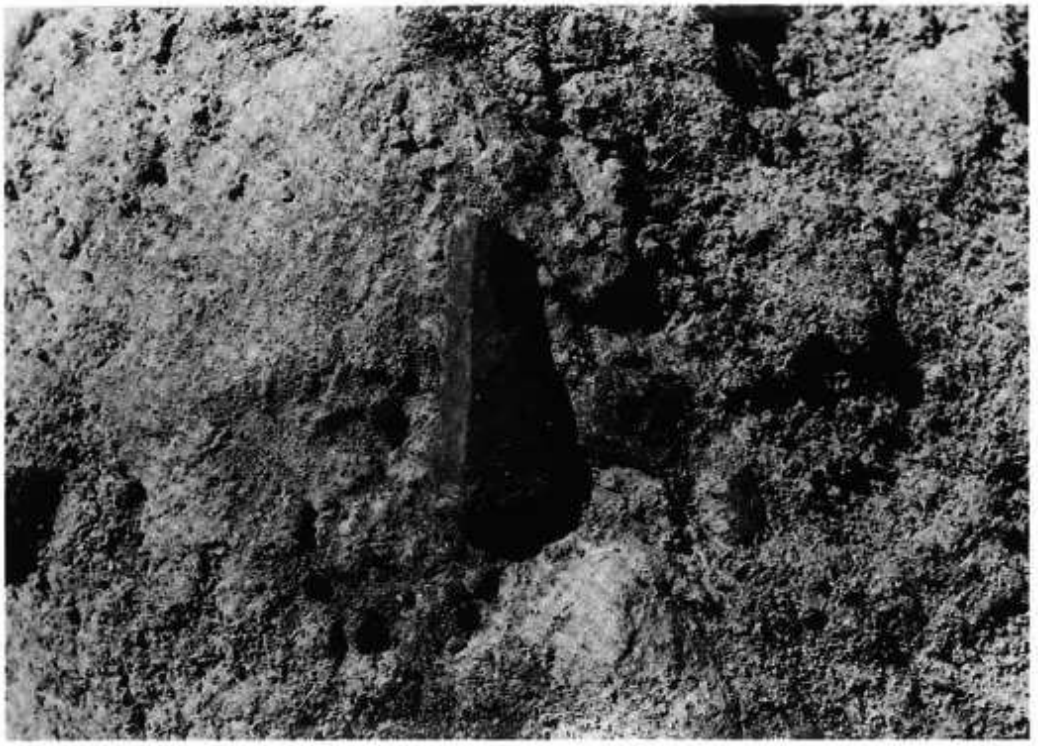
SB1001遺物出土状況（弥生土器）

図版10

A地点　ナイフ形石器出土状況



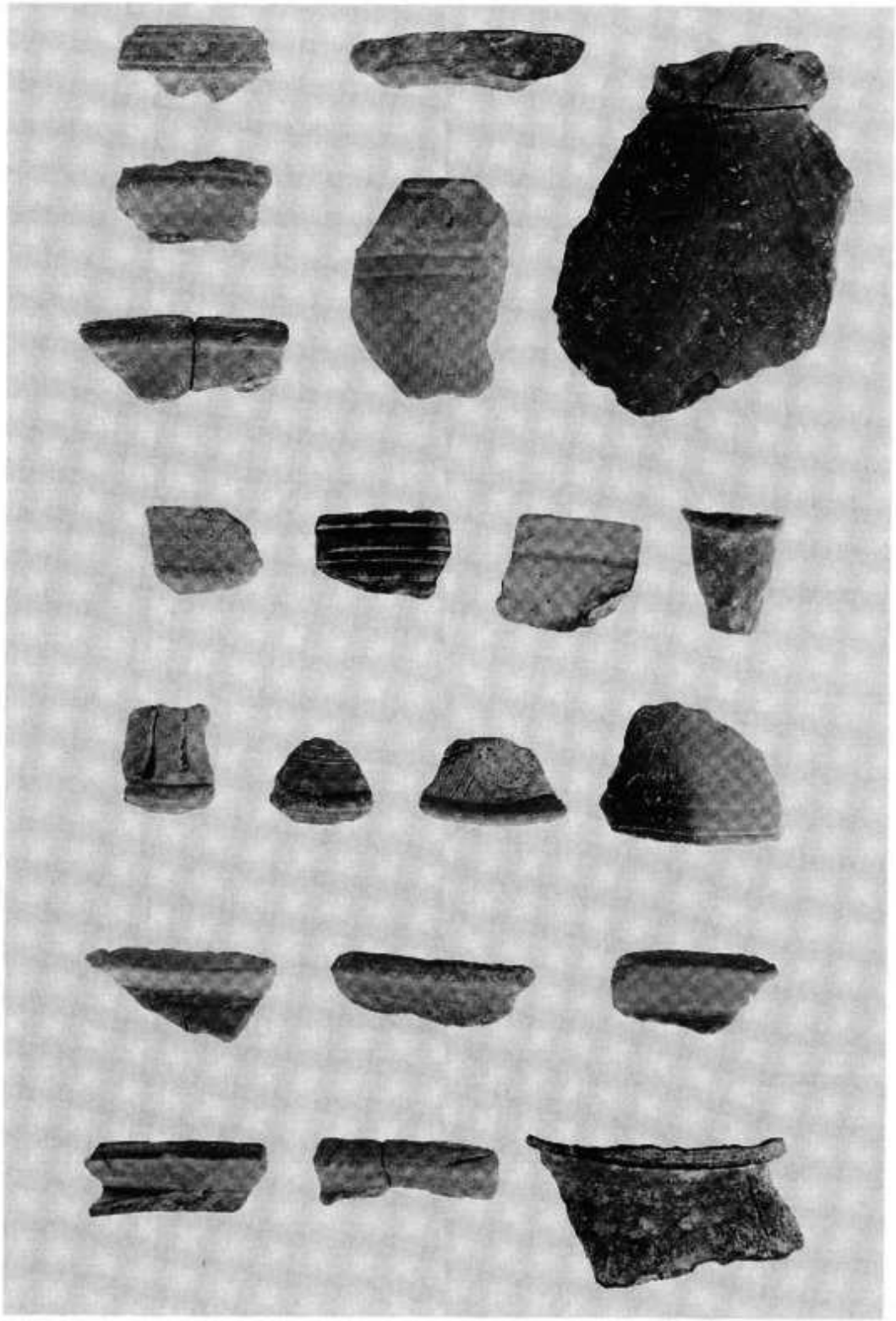
B地点　ナイフ形石器出土状況



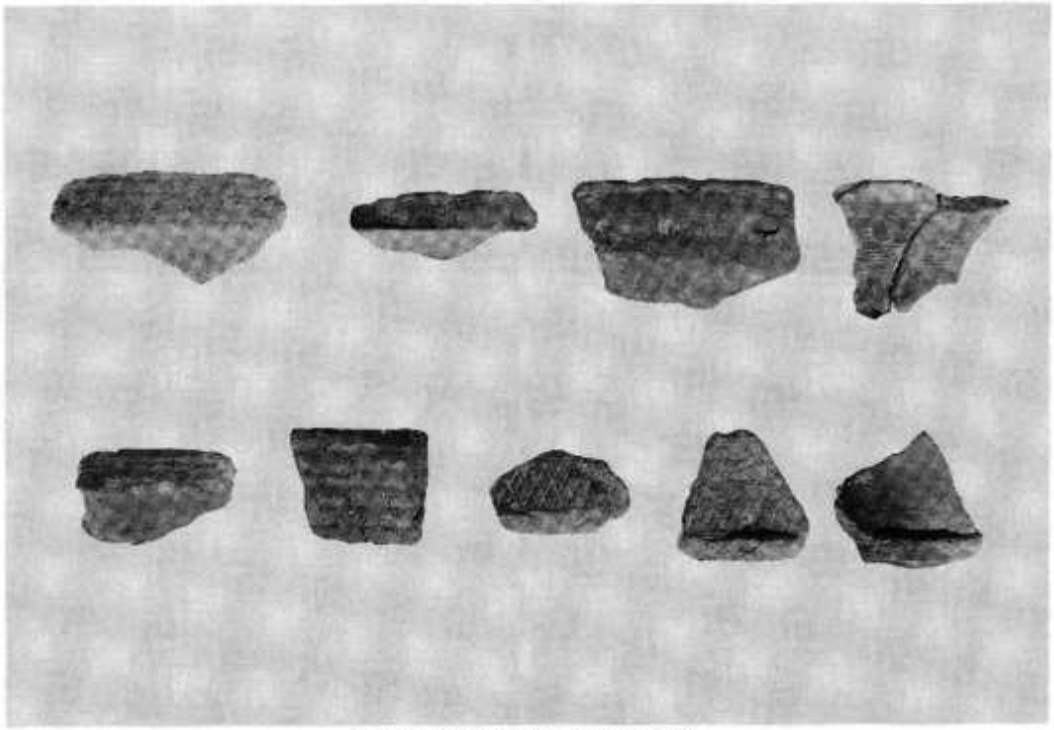
B地点　ナイフ形石器出土状況

B地点スクレイパー出土状況

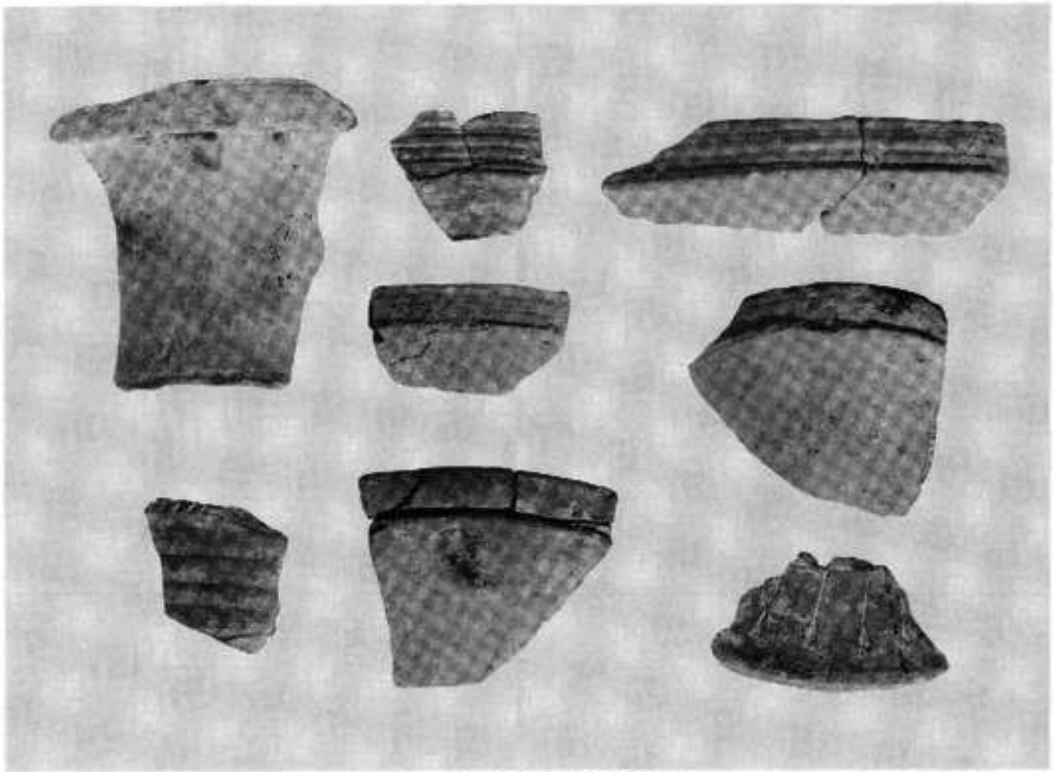
図版12



S B 1001出土遺物（弥生土器）

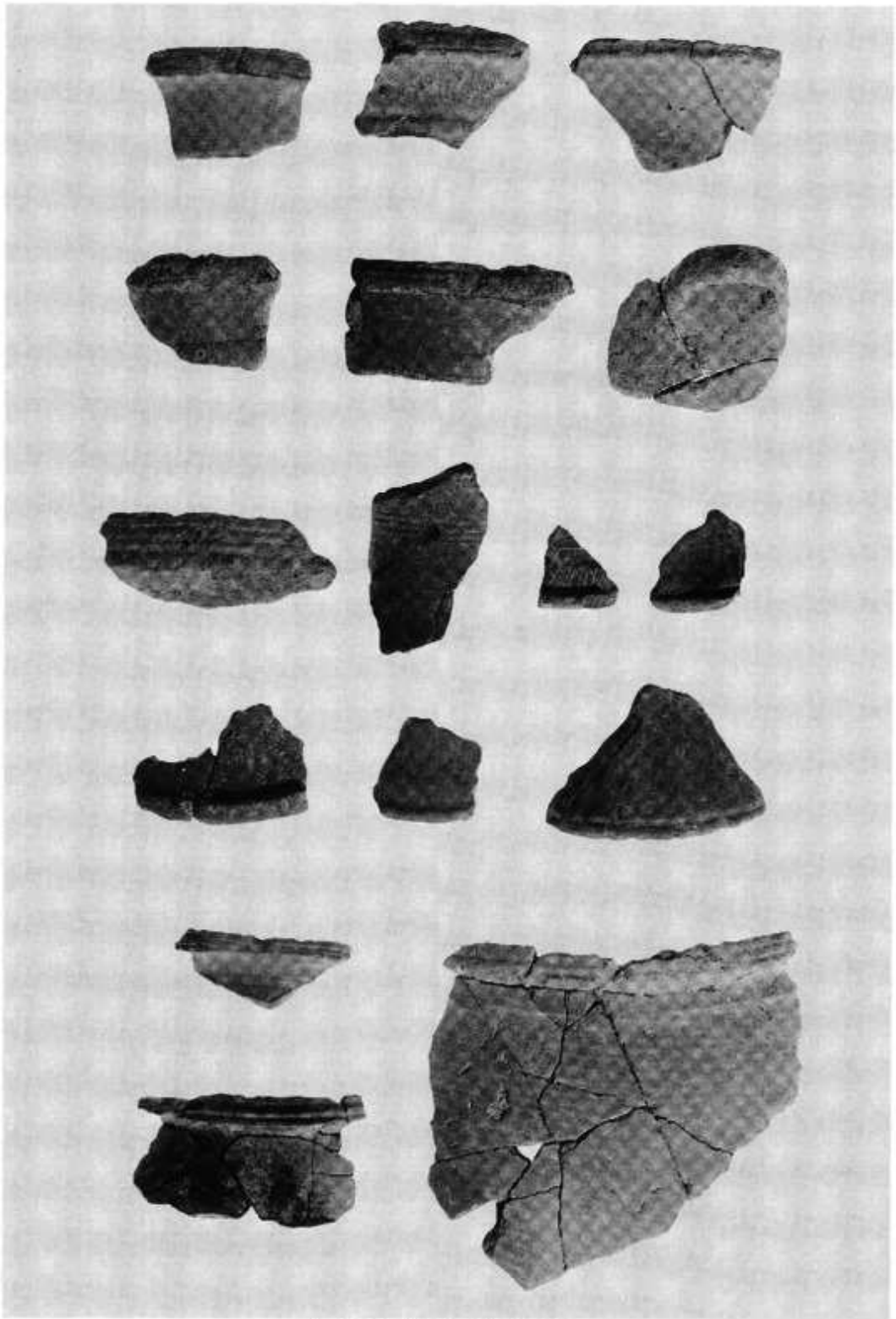


ＳＢ1003出土遺物（弥生土器）

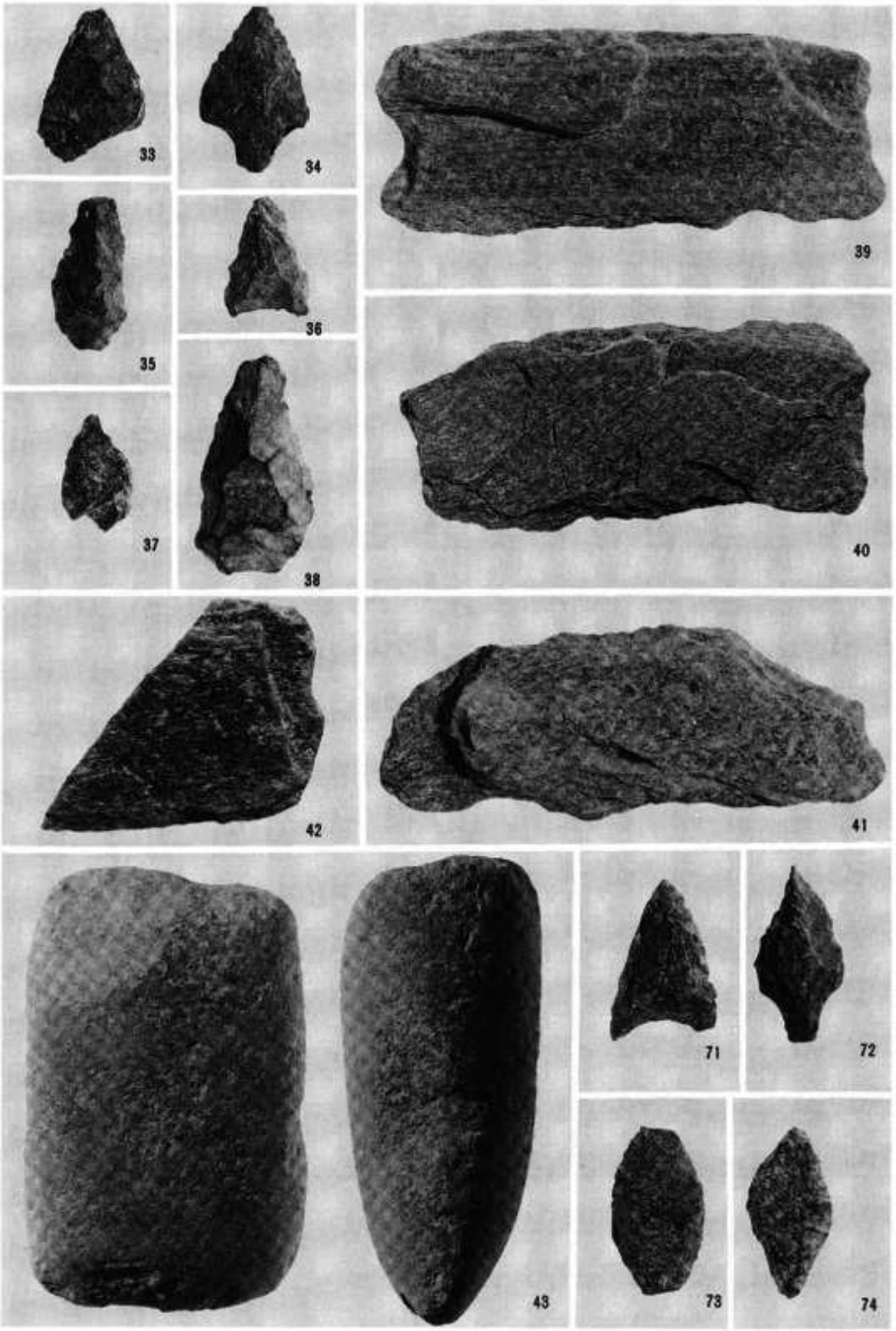


ＳＫ1003出土遺物（弥生土器）

図版14

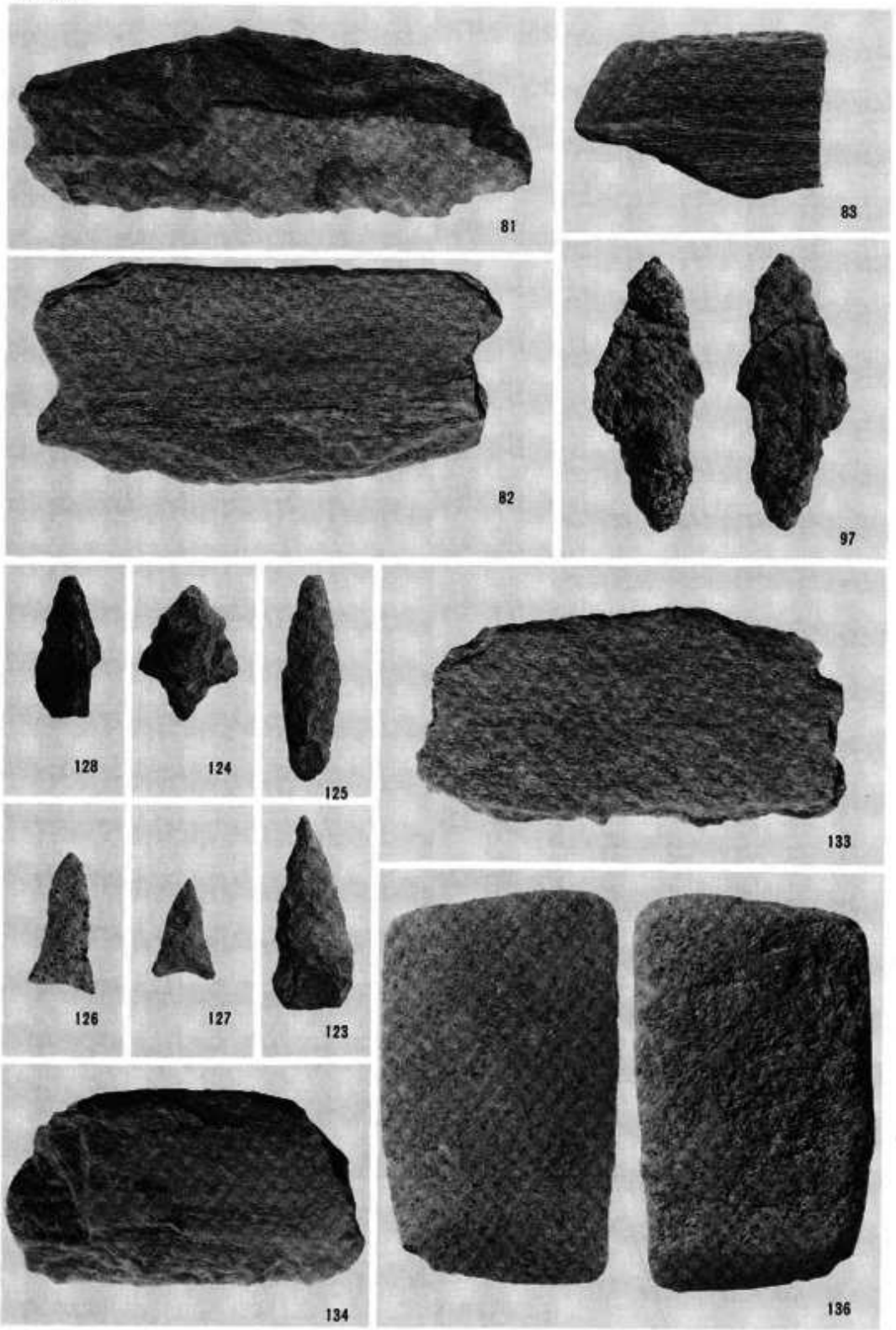


包含層出土遺物（弥生土器）

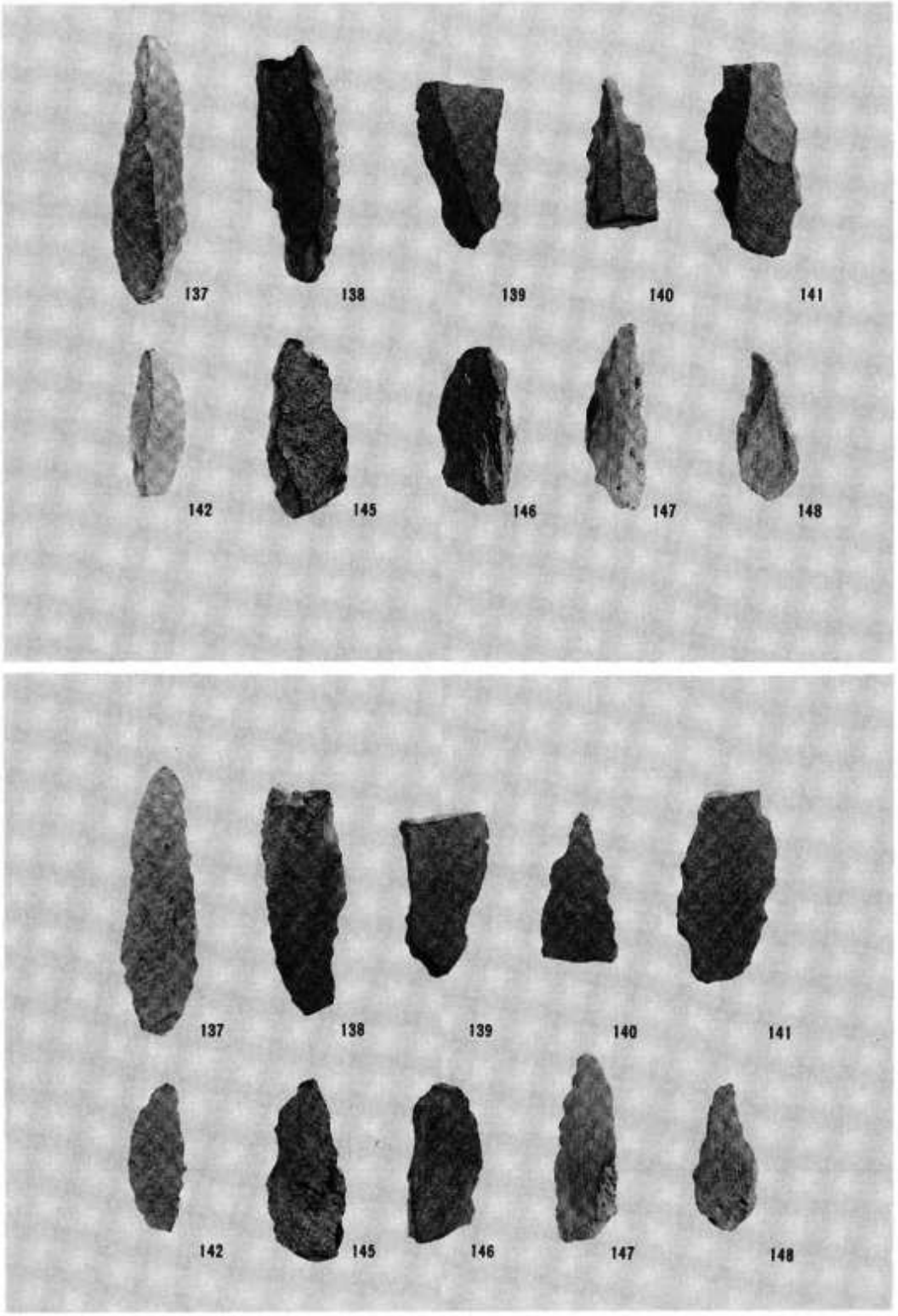


出土遺物（弥生石器）

図版16

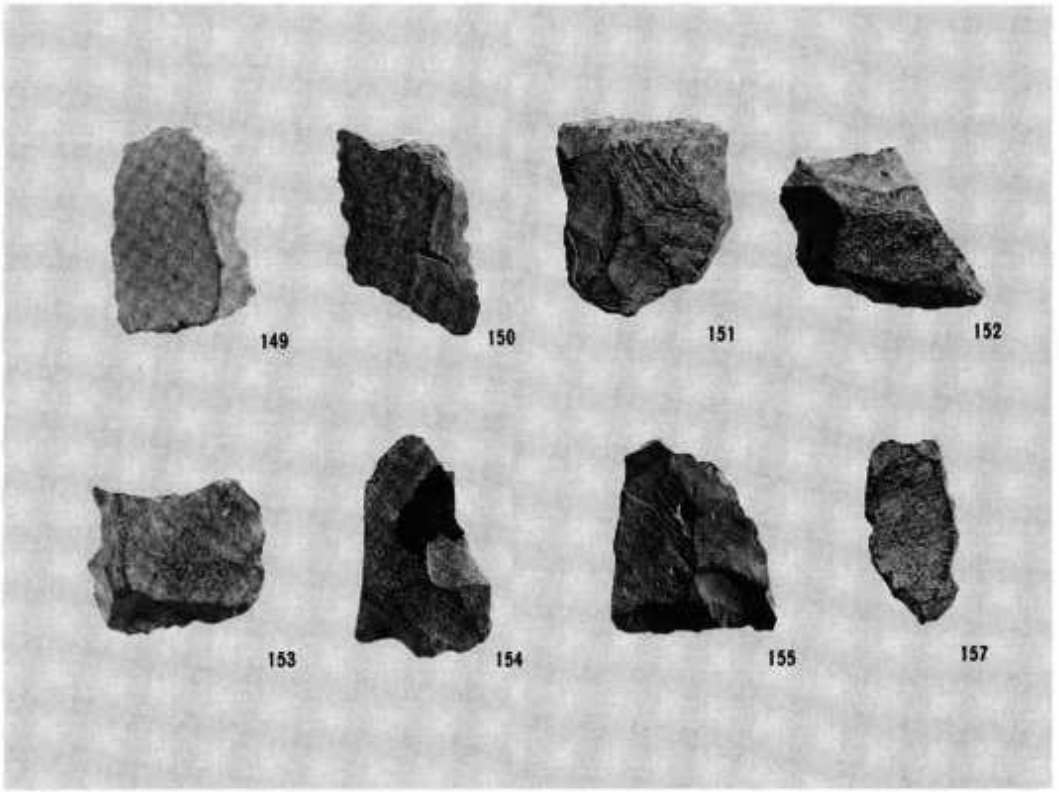


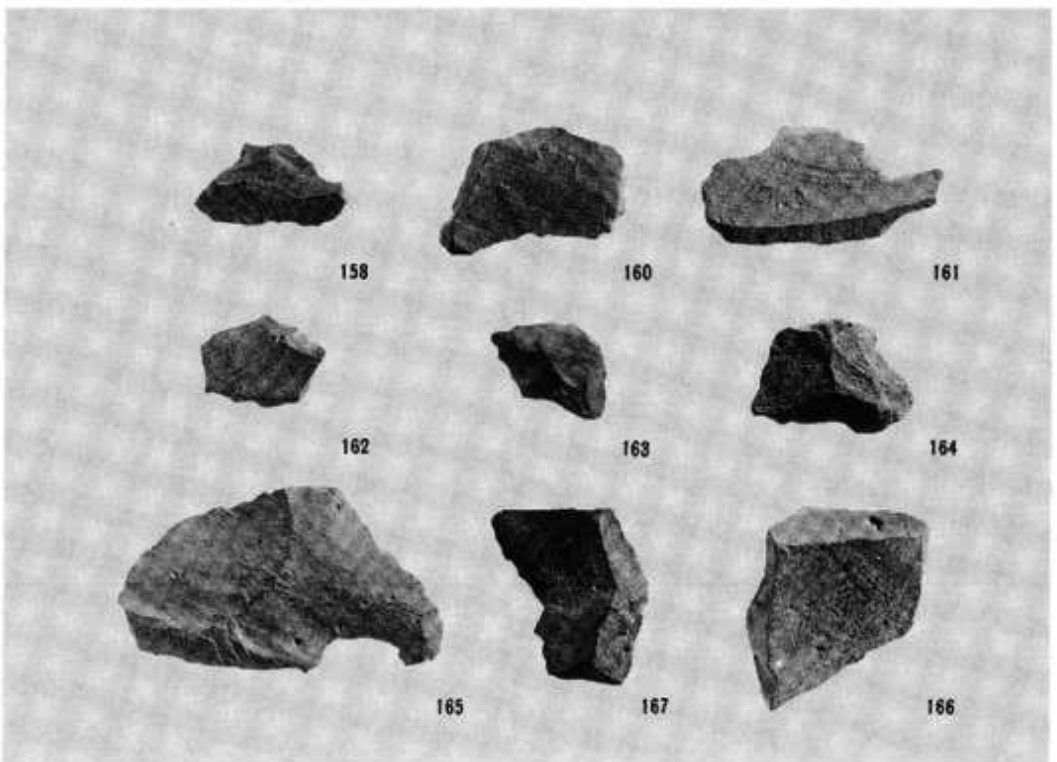
出土遺物（弥生石器）


137
138
139
140
141
142
145
146
147
148
137
138
139
140
141
142
145
146
147
148

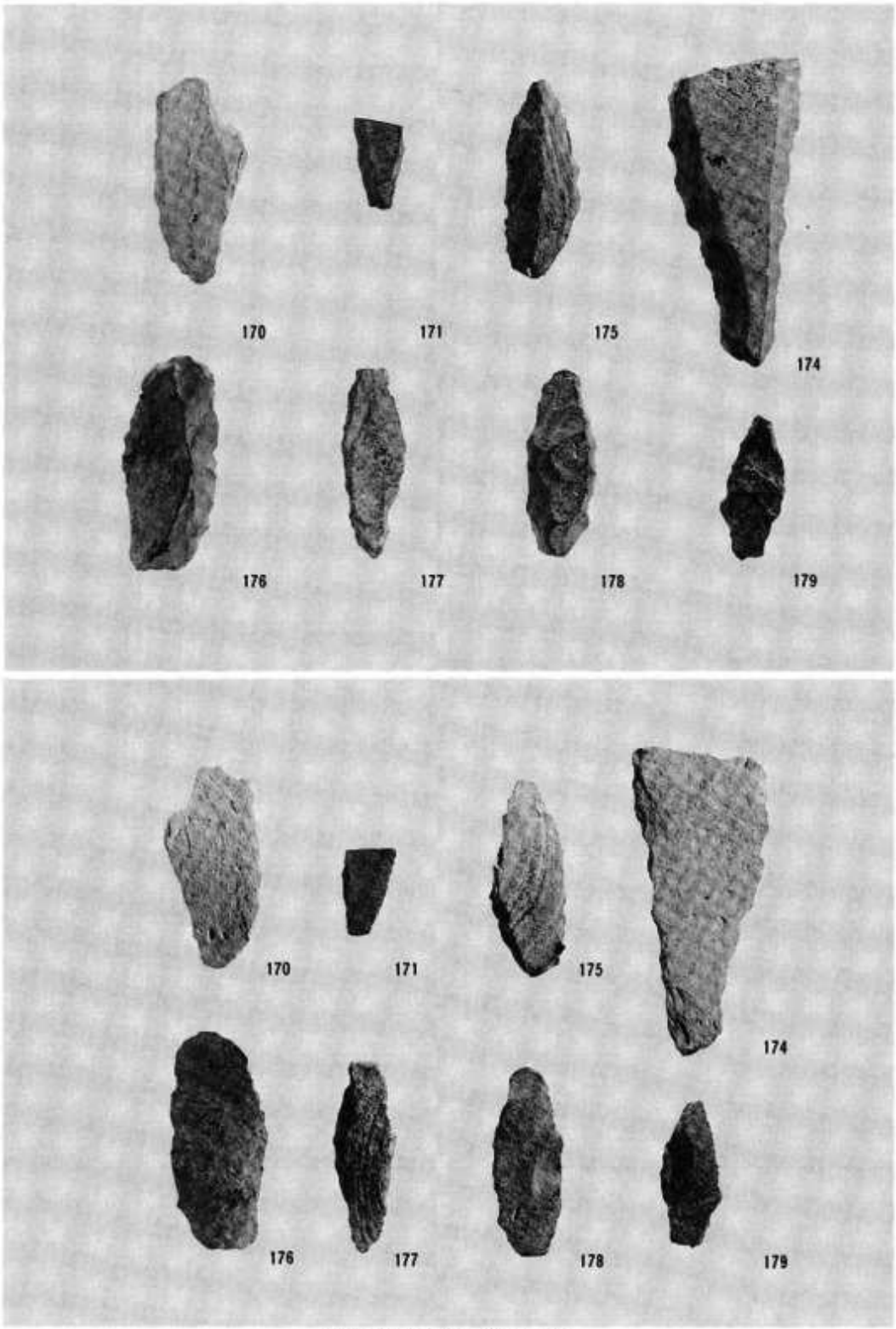
A地点出土遺物（旧石器）

図版18



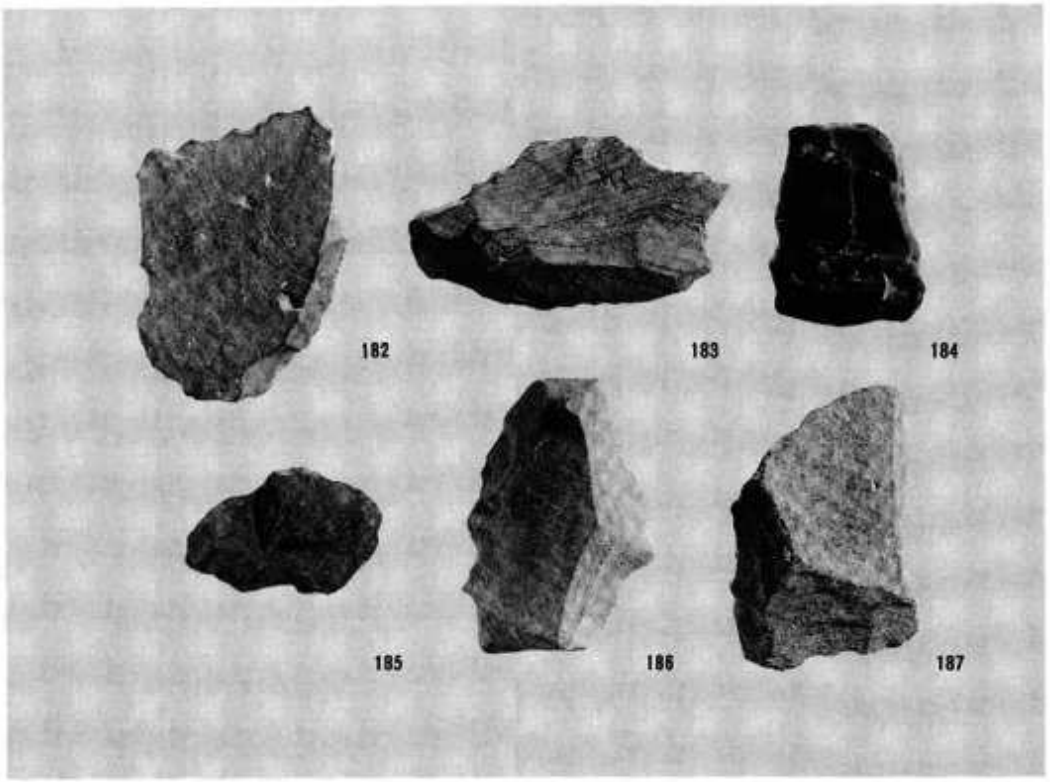


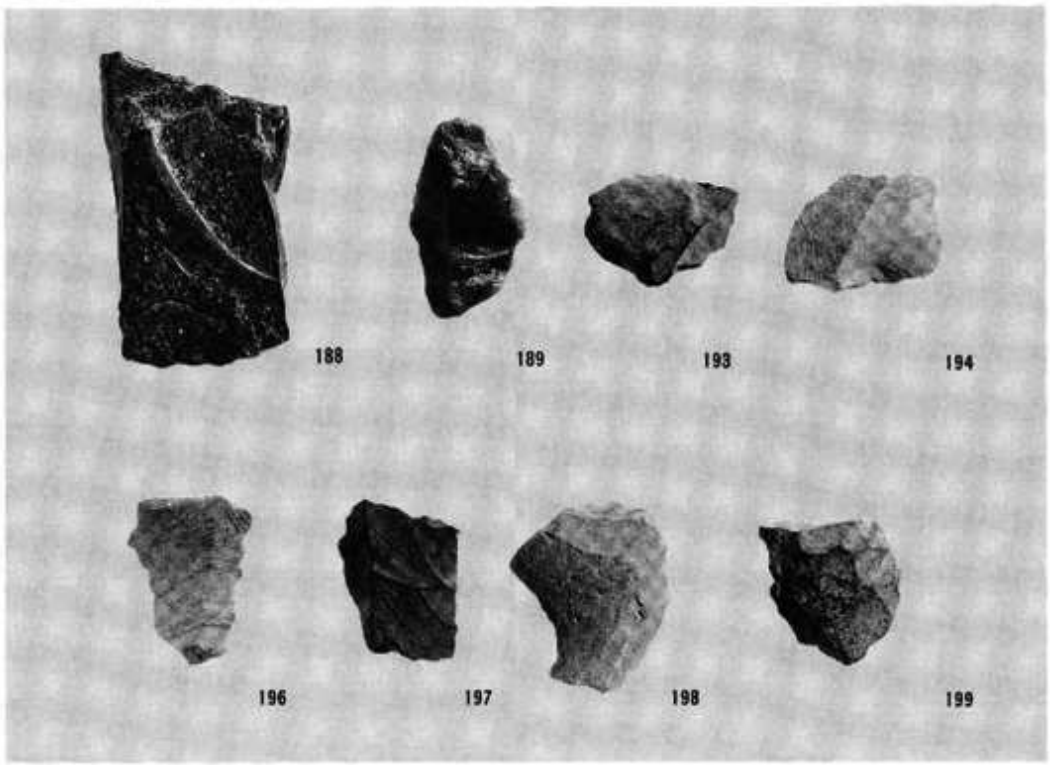
A地点出土遺物（旧石器）



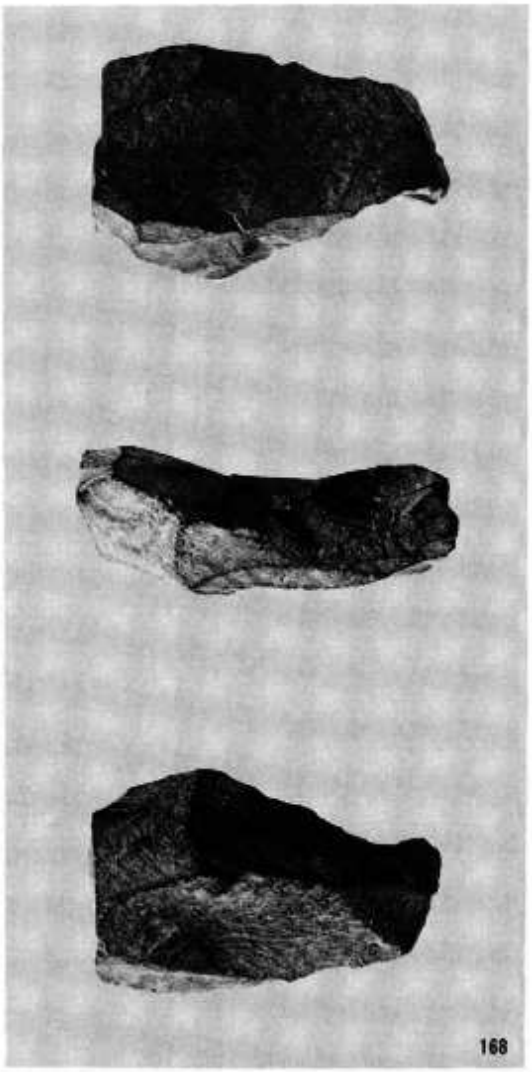
B地点出土遺物（旧石器）

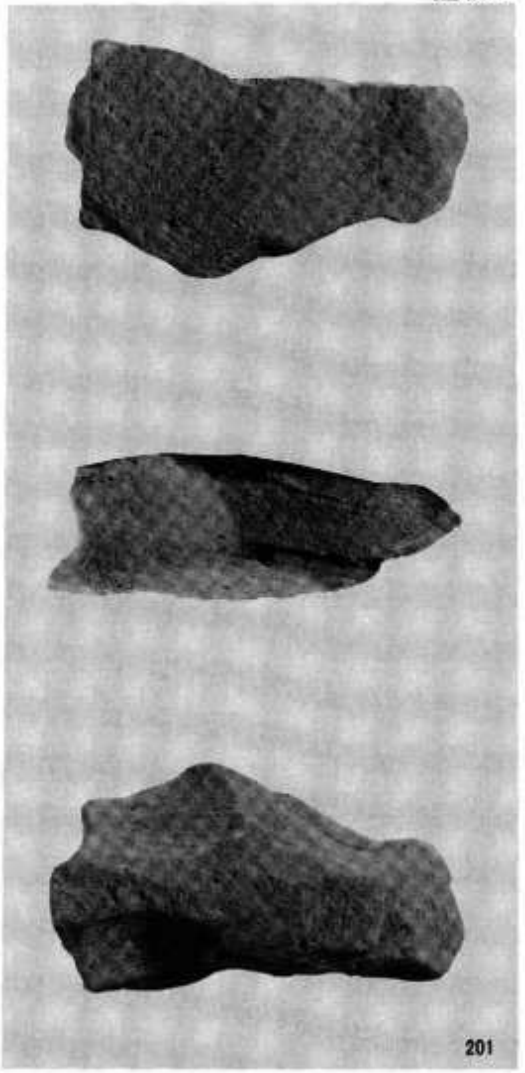
図版20

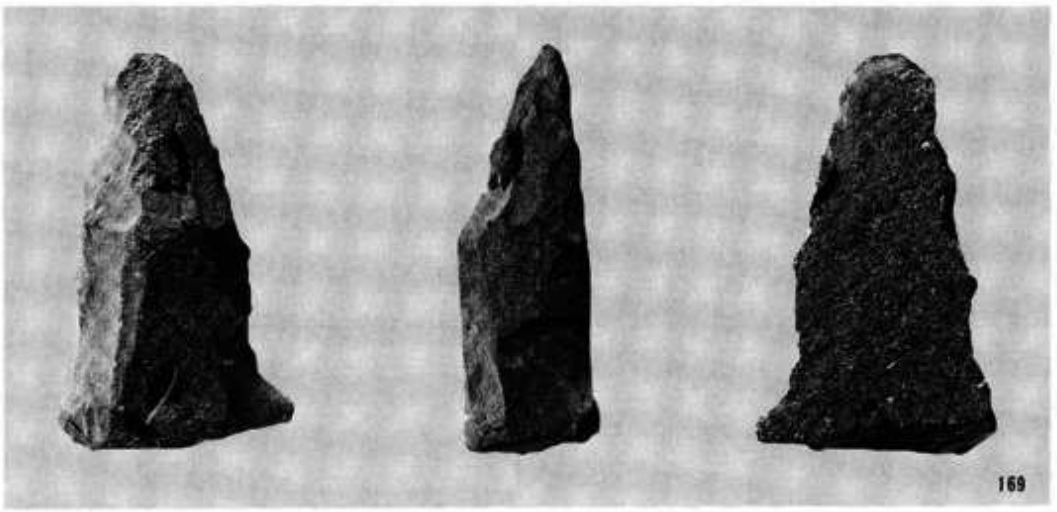




B地点出土遺物（旧石器）

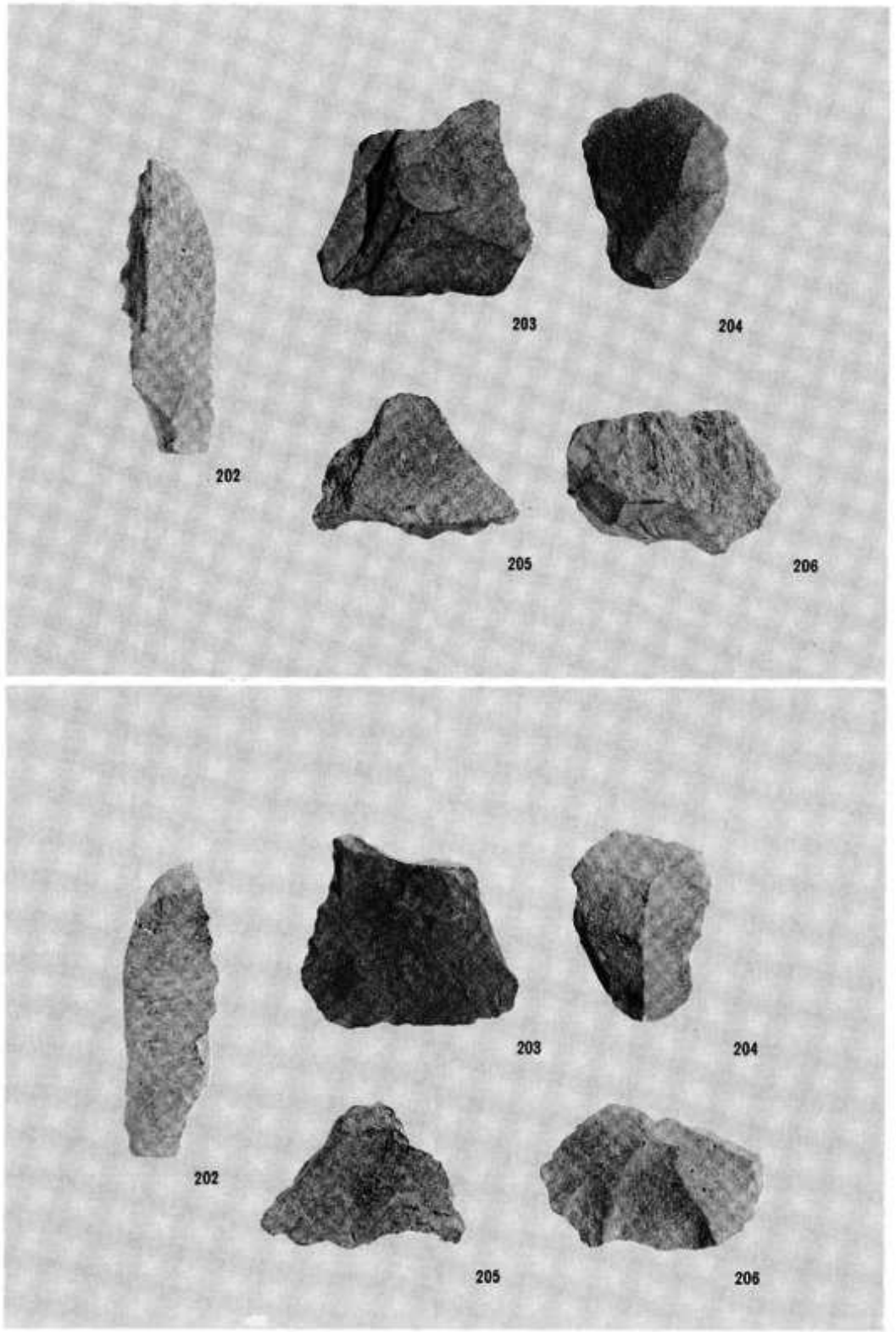




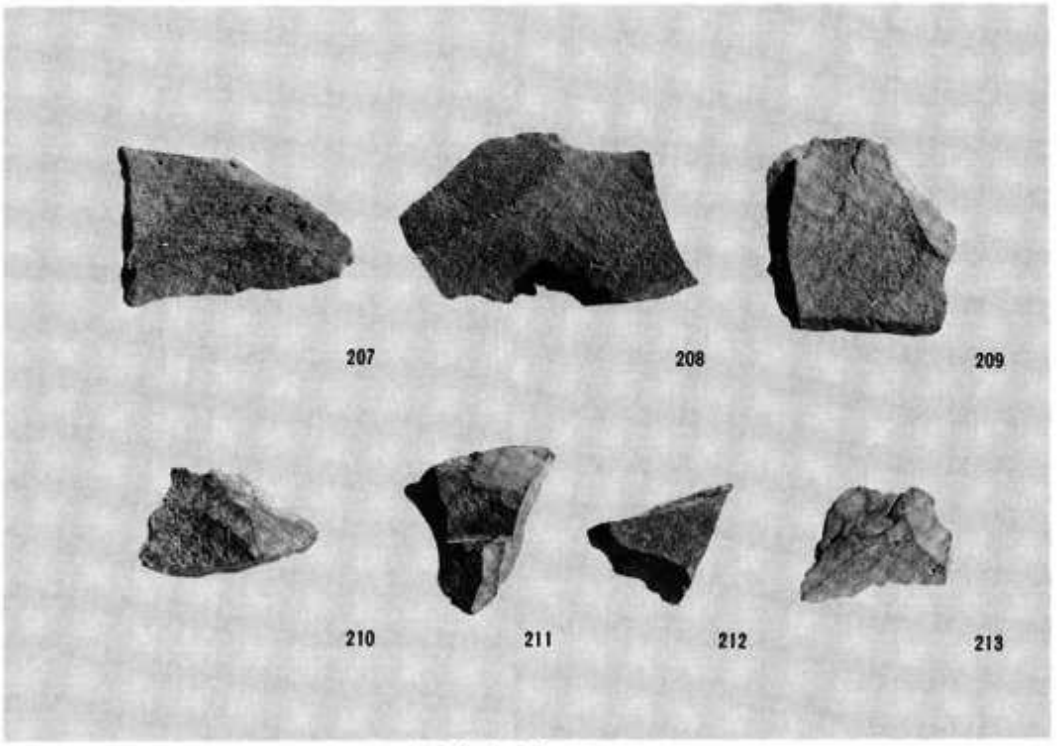


B地点出土遺物（旧石器）

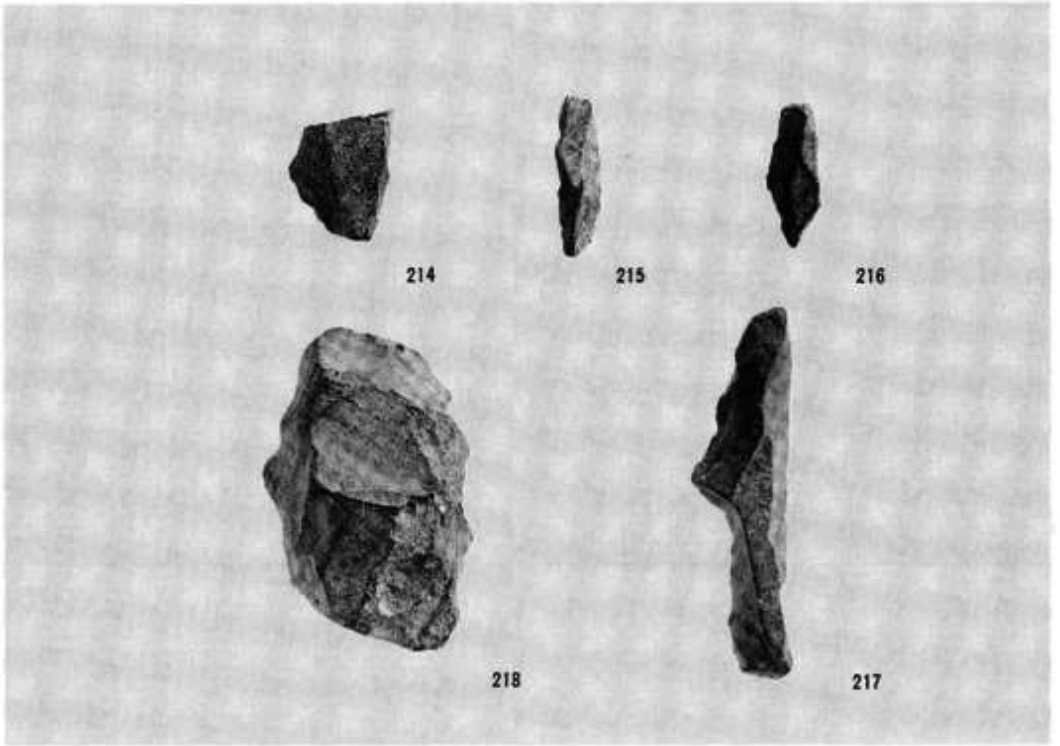
図版22



C地点出土遺物（旧石器）



C地点出土遺物（旧石器）



表面採集遺物

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第6集

四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　6

発行日　平成6（1994）年3月

編　集　財団法人　徳島県埋蔵文化財センター
〒779－01　徳島県板野郡板野町川端字関ノ本25番
ＴＥＬ　（0886）72－4545

発　行　徳島教育委員会
財団法人　徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団

印　刷　㈱教育出版センター